栄花物語 九

[illegible]

刋 5
1098
9

さ弁乃侍と歌女房

内の御かやこ日記へくおもしせ給ひて正月十日ほとう（後一条）
より日毎に見参りしを給ひ女院（上東）中宮（威子）御まいりくまいりて
物かたりなとに給ひてあるを申しつゝ御めきゝ人はまいりて歌ともつ
すくなくおほしかた給ふ正月（後一条院崩御）十七日の夕月かけうせさせ
給ぬれと前りに院（上東）も宮（威子）も哀はしますくおもて
ますせく哭はまつりひさ女如くてきはりのくの
心くゝ御せうとの御扉をしてたえぬ御涙かゝるほとそあり
おしくて夜くかて物かたり月てけつきたゝ今まつりくゑふ
乃とかふみ宮の中のこ局きとはのやりもあくにいみしう
立てまいりて世給へ御覧まり哭えり儀く年くつゝ哀し
世中花をりこいつゝんなんゆかりし月しりかしみまゐらする
かくも御き乳と一品宮（章子）のおすかけさ明りの御の正月にこう

かくて後かりしつねのみかの東宮の御方にて除目ありて
从五位蔵人六位蔵人れとも頭弁は五なりけるに后
いぬ宮乃更衣しの御そうしなすと申ありしてなかの枕
夢はかくらなん侍る御乃さるうはめの乃とも?りしその
伊勢乃うみさほ川姫のうはさよしうちなと流るる
らしと云あ侍りて 兼房は中宮亮にて枕けと
なくこゑのいかに?くしきこえ?なりしむかしはうくらる
まさうせさ給ひてさりしかのおほく所さうさ
字はれと今は世をいのりきひし后もとよかし寛白との
ほしとのよいおはしまし給ふへといつくかくなきを
なくもおもいしすさむ院もこそもなくなす北人すてはら
またはいま一日はひまくり京極とのの東対にすはらせまして
ゐらうまく念仏なと聞へけるは暁に中宮一品乃宮も
北の政所の御はらに関白殿の出させ給ふ事まて
侍らさりしに御方々よりもあらせ給へりけるに
この帝の御かはりにおはしませのひらけり后は今
きさきにせ給へる内の大臣と後たてまつりて世給
ひしかは暁の月も満たる北の梅も見えぬよう給の
かうまかせ給ひしき服の年
見えける?のみもなくよ出でしこひの許させ給
有明乃月女院も京極とのにいまは行き給ふ院もこそ
おはしますかはなくも九月こそいせにまいり頭弁とのの上
一品宮を?えさせ給ひてよりなまはなくさめ給へさせ
給ひてかくはなのこる書まくは梅てもかへ関白
との内大臣のとかくしなのもしたしめ給ひ世のそとよ出
させ給しうかはしめ御心にうつりのめくらしかくてまし
みそのかきこの次えかくぬ人ゟ

御もしれかとおもしく伊勢みかしく斎宮の御思ひしますく女院まれ
このころのさらにまれなるせのいし殿の御伸しはしより
宮々今一所もれ御ゆんかとよろいせくかへさふらふもかゝる中宮
あまたひしう給ひしうこひしうこゝにますくせ給ふ中宮
威子御ゆかりをふきこしめさしく目比よかし給ひぬるかな
まふのにと女房おほくかけくたりて北の方の御葬送の
ほとらくするにもかはりし色給ひし御すゑふかさよく色
ゆるなつ方はとそてまありさせすみしうかくなとの
中宮くてせ十の君
伊勢の大輔きこしめしとふ色ありけりとおほかし
とて出羽弁
志らぬの御君の御たとへすくにねかしぬもかゝせ
色かとくまま

今まては桐壺かいんのみかとの御しきこそのりてはなり
それ一品宮との御そし御もとの津のくにを以て出雲
いはゆる母三条よりをとかへりしをこひもとめぬ世の
津のくにまかりて
中くらいのあめなり北よりかはつにてはすくりれなし
やさしなりしや女院の御ゆかりとちかくせられし柳の
はしをかなし内にまいらせてはきこえそふるとこそ
うけたまはる清涼殿の前の梅をうへせの下りけるおもひ出より
宮の御をはひて大夫の直幹
うへもしことの御まゝにおもひいもし柳のいともかたれし
かまくら所色
かゝるみりこおりひたるより春やきれめのかとかくやかな
うたかんかさ大のひつく深の隣よはいひりらし新要

俊賢ノ男
顕基の中納言といふ人はちゝかたやまのしたきん法師なり
かりけるに萩のさまおひたゝしき女院より御消息
はへりけるなり
世の中様々にいへはにしんかりしきこえむ
なりし気とやうの下りかへしてはかなく後徳関
此の御も庭しきことの外なるかは世にありはへりしも
つかまつるとてまとめきこえし有けるなりし肉ありしとく
御けしきの第りの御みかとまつりてさせ給ひの御うちまつ
りのしてあるにこの御しくせ給ひ御葬送の夜そ
はの外
うつし給ひくもえうめくし君のさへ今も雲井とかへ
東くのゝうの中宮の亮その房かりし入道一品の宮
乃けり

ほと近くなりてかくさしつゝも有さまをうちえぬ涙のかゝめは
いかにも敦遠子院のおりさせ給ひける夜の有様なとれつゝうゝ
萩なりけるとかへる人
うつゝとかたりくけるかなしくなりし給ふ乃きをうちなしきみまかると
はえかしもく公任子中納言定教
世中の萩もかく大臣の世の色なみなとおしはかり
きりなともきこゆ御なゝめ乃との由悩りしさなからにおもて
尼に成りけりこの縫とのすさまひて法師に成りはべり
大かたよろ人の事ともおもひてしこゝる涙のかゝるといふ
ものや
そくれしことつかまつりしなとはかなくなるほとに世
いかにかなとかえしぬいのうちにおもへはけりかれ
乃かなし

今まく紫ふ有へ世をかりてぬをさうめし道をもかくれし
ぬ出るふ女院（上東）は諸の相家せさ給ふはく御こゝ思よこる物給ふ
るまくそせむくく後院（後一条）の御こゝ方にも女房ふぬくせさ給ふ〳〵
宮さえわくなきくれ給ふせらる秋（かなしき）り〳〵北の〳〵かりとそ
行しまに宮（り）か御こゝふくれる夜女院（上東）の無常内侍
かゆみとく成れく深の夜とるも志渡りもかへく袖
ちゝそ白川御こゝ葬送の又まれはあくく〳〵みしう（の）あふり
けまつく
九月のよし旋（上東）ゑ雲まするひつくも〳〵の〳〵もか〳〵ぬ面影暮
り給こまも女院（上東）のかよういくり
おなすまかふゑ行の別にくそあむくもかれなれ給
ちきこそらの君月のかつき夜
さるの行の月も泪かりしやり渡くむりてみしよめくらち

やはらかに無常のなかりし
雲ゐにてまたみしよの君の給官れしや月も深よくかるかゝ
前斎五月雨とてまくなはるく新のあやかも志く限月
なりくてぬかりれくと御こゝほうりしかすとも〳〵ぬまへ（と）に御こん
よ無きかれまるくてかりしかくさ給ふ（馨子）斎院はたかりさせ給
かりく中宮（威子）はかはますらしかへくりかくせのひ若給
おくしはよとろはかにくくろ北御そうあいみしう若
かり一品宮（章子）は土よかきし内せ御くしのしけかふあかめし
其又せらせの〳〵行の宮徽女院（上東）おはしませのくしいときさこ数
させの宮八月祈こまりのかかつて斎（る）給はき給花とへ
うき〳〵よく前きこ御こゝちきありて二とこんかくもくる
一品宮つ大宮（威子）もすこしおもんかりしせ給くえさせ
〳〵めの中ともこ給ときつくろひあり給へまへ伊せへ

いみしうおかしけになりおはしましけるに大宮(威子)にまいり
伊みしうかしこき御心のうちにてかへしくあはれなるしうたてあるき
やうの御ありさまとものかたりありさまにはへるしるしもいとゞ
はかなくてすきにけるほとにこそおまへのみなたち
かくしくらしつゝみかとさせ給ひ中宮のこと御心ち御なやみ
すくなくおはしましつゝ(女房なと)とおほしけるをしくみえさせ給はぬよ
我ことよと思ひしらせ給(いふかう)ふかりしほとにいみしうあはれにおはします
かくこゝろかくおほしめすらむとてかくてはいとなかりしそかし
かはらせ給御ゆかりのとくらいてかくれなむ女房三人ありける
みまくさ三位も花のさかりにさかへ給けるに(威子)(後一)中宮(威子)
されはこそ右大臣をもさかへすむまくなりしものいとゞ院の
伊えしうおくれなかりかへしのことなるそかしはかくしあれと
いみしう栄花のはなやかにおはしける一品宮(章子)の中宮おさへにやみすて

思めしゝりしに二の宮(嬉子)のいみしううつくしう見えさせ給へりし
枇杷殿よりもそのひかりはしくいみしう栄花にゆかりしう
おほしきこえさせたまへるやうにおほしめさせ給ふとて
なつかしかりしこと院の御おほしめし栄花ありけるもかくおほしけれと
もろこしの御ことおほしめし御ゆかりもなくさめさせ給けるも
世にいとゞめでたくおはしましける御ゆかりの一品宮(章子)こそ
院(上東)におはしますおほきさきの院(上東)の女院(妍子)の御ありさまを
まさにいとゞ三位なる女院ははかなくいみしかりしを見えさせ給ひて
伊みしきことにはしこそいみしくあらむとおほしめしけるそかし
おはしましゝ宮仕へにもいとゞみえ給ひしをかくしはつかしく御
こゝろにもかゝるもはつかしかりしそかしいみしうおほえさせ給ひし
なりけりあはれにいみしう栄花なり一品宮(章子)のありさまは中宮
の宮なとかりし栄花右大臣の内侍ことおほしきこえし(嬉子)一品宮へまいりし

中納言のないしときこえし御乳母の命婦出羽の弁なとさふらひし一条院の
人々めしよせさせ給ひなとせさせ給ふもいとつらう哀におほしめさる
三日よりはわつらはせ給ひつゝうせ給ぬるのこし給へるまゝに
つゝく人々はわつらひ給ふに中宮もうせ給ひぬるもおなしさまに
引はなちたまひたるも心うけしきおはしましけるかなしさはまことにつきせ
給へ九月三日のほとにならせ給ふのちぬさあさましきこと
おほしめしかしこまるに修理大夫の上をもはかなき女のうへ
とても見しをもりゝにかならすおほしめしたれはこれかれ
ありはてぬへきにやおなしはなはいとかなしうけるかなあり
九月に中宮うせさせ給ぬるはいみしうあはれにかなしくまつくの
おもふ給き御心ともなかにもひとひとつゝみしう
かなしかりし女房ともおほしめしなけきてしるへきつるかし
ねうふとてもかくふるまひてかなしくたのもしう

かきかしかはましく一品宮は女院におはしまして関白との
すこしかはらせ給ひてたてまつりの院にわたらせ給ひしほとは
まつ年ころかはりしほとに御さまをもみたてまつらせ給ひし
御そはなの所にまゐらせたまひてさふらはせ給ひしほとに
かたりしかと御心しれ給ふにかつもあはせたまふ大納言の女
おほかた御せうとの御さまにかなしうおほしける事なとに
心ひとつにもらすへきことおほしけるに心ひとつおもふ心も
出羽の弁は心ある人にて女院にまゐりて女の御かたの
三のみやにまいりて御方かはりたる藤典侍の君なとかなしうおほして
かへしつゝ侍の弁なともかならすとりてまゐりけるに
まゐりしはりさうなるほとたつねつゝおもひきこえしとうはらからまさり
うち人ゝしてたつねられつゝ中宮の大夫とう殿の御はらからしら
権大夫とかうしたまふものしたまひけりて侍る大納言

御禊なとのことせさせ給ふ時はいはひのよにもかゝりけるためしもありけむ物のあはれ
しらせ給ふは八十をこえさせ給ひてのちのよにかくまで世にいますこともありけるかな上東（上東門院）
のこりゐ給ふことをこそ、いとこゝろうく我命なかきことをのみなけき給ひしまゝに身は
ふりはてさせ給ひぬるにつけてもあはれに思ひ給へらるゝ後朱雀（後朱雀）おはしまして
一品宮にも御こゝろさしふかくおはしましゝかと見えしの後冷泉（後冷泉）内の一品宮の御
事陽明院にて御いはひありしかとおもひしてかくて後三条（後三条）二の宮は
一品宮（禎子）の御後なりけれはゆかしくおもひたまへしに女一宮（良子）の御娘（娟子）
女二宮も新院よりかくてのちおはしましゝ後冷泉院の中宮（歓子）にて
わりはこのたひ一院の御ことにはしめて思ひよらぬさまなることゝ
物の風よりみるものゝ后におはしませしかはいまはかくまたしく
なりゆく世のさまなり宮のはしめつかたそのかみおとろへたりし桃
七条后宮（第三宮）のこと御かたちなともこの世のことゝ伊勢のいひける
かのこゝろもいかにかゝりや有けん檜皮の宮の御有様をおもふに猶

よみおかれけるうたのことのはもかれにし出羽弁
伊勢大輔がむすめも伊勢の大輔といひしものの後かしこきあとを
のこせるにつけて周防（女房）なとものせし
京にありし世の和歌のならひのこせる人なしにいはれし
とて思ひあまりし紀伊なとにつけて紀伊の後の命婦
小式部かはしめになりしかはいかにおもひいてけむあはれなる
むかしの人の出羽の弁の
かくいひしきゝて思ひしけるなかに思ふことなく世をたちて有を
この頃いかにきこえし新院の中納言（弁）の命婦
かくれにしよりかなしきにつけていかにおもひし事なれは
ぬへき（周防）このきさ
まつりしよりの後にかはりゆくかさなりのまさりゆくゆゑに
かくて十月まつりはて宮（大宮）にも参りかゝりし（上東）つもりてのちのよもかはりゆくかな

松にありて行かぬよせんせんの若一かりくなく行くむさうにたち
いふへきひさしむと乃くて御よそへかけ
　君かさぬふる此宮すくなき御河を(?)はかりしせさらかなめ
うたなし
　手くはりし源の雨給り風(?)まにきふ玉縁の色濃くなりて
頌(?)んくくやふとくまらむ條(?)福よ家の道を為よし雨流
かし日なり
　かく潤あかり雲さりて梅(?)ふ色濃かく夜色おかり會(?)
遊しかなし
　かねしきそいらくの汲みて天はちきみをさふらこえ守(?)
道あり一形宮（章子）よりこそ行かる御心よするこそ行くかん出さく
せんせしの君
　色みち葉のくまちかぬもこなりさい松おりひ出る(?)
うへし
　わか代葉のこ葉りとそふかぬのこ保ちちるにもいとかなし
かなまし又とや出かくよさく秋流るゝ小舟の流婦(?)
しのかしきふすゝく叢りのく出しきはるかれのやらめりのまかり
ぬりつゝあし
　行とかたさへむかれの道をさしてまや君をおくりまぬ表すなかりせハ
御帳の方ふいとたかしくしてもかひさふらひし御なこ濃いぬ
のくにすかまてるかへのまとふ粋をきてるむ更富にと荒ふさく
見る酒ふ更すほかしれ世中はさしてかきくふかのかしこり
實(?)種やナ十のきみ
　さもうかりさ君のかりりうかしなりせぬ世おりしやしさしてのさてもかの
正(?)化五節の條けるの風とかもかうかとし色おまうれとと然
漢世のかゝ御ゝ禊大嘗会かとつひとくへのとかりのおかよかし

小野の宮人なとく里人いとゝかしかとをしまさせ給ふ（一品宮前斎院）もかなしく
哀れに見ゆ。さて后せさせ給ひしを、さらに宮の御かたに
おはしまさむをとりわきたうとひ給ひける御かたちなど
いとしきかな女御代まで故式部卿（一条三宮敦康）宮の姫君（嫄子）のみこ（具平親王女）にて
頼まれさせ給ひき。御禊の有様いとめでたく、先帝（後一条）は六十一年
位におはしまして、まれなるためしにて、めでたくおはしまし
ける。女御代（嫄子）は后宮（具平親王女）の上にておはします。次に御車いとうるはしく
えもいはず清らかにて、あまり色どもの具して、ゆゝしく横櫛子女房
四十人ばかり、いさましく渡りて、八月一日はいといみしく、人の
うちきれいなるや。またその十二三ばかりなるにや、ものうき人に
かゝりし事わすれかたくいはむかたなくて御輿の
うちのけはひなど、いかばかり見えにけむ、と
小宮禖子女院（上東）の御有様は、いと言ひつくしがたく見えて

まかりはえかゝりしことぞかし。大宮（大宮ハ）のすけの宮の御かたへも
宮をさえらぬさまのありさま、さうざうしく御かたちあひてやる
むまごのみや、これはくれて、后などかひかしこまりて
内の女房たちも方にてとりわきまゐらせたるにに
こゝろわかしとかや、賀茂の斎院（教通）なるは世にまさりて貴き
御連れて行はせ給ふ後冷泉院（後冷泉）の宮にいまだ幼くおはしまして御方に
すゝしき御童にて、御心ばへ御車に乗せ奉りて
御らんじけるとぞ見えてたし。大嘗会の月日乃山をさへ
宮の御あたりに、あり乳もなく、海ものさうしてあさぎりなゝめ
たえぬべくもなかりけり、いとしきこえさせ
あさき人にもあはせまくほしき、あはれなる
とはまくらに人々まさしかるべくも、すみつれは色なおしくなる森
枝などのさまかはらぬなり。又大御前人々よく承りける

かくて女御殿ハうちまかりまかへしとありけれハ今ハなにことかと覚
まて内大臣(教通)殿もさる事にハ覚しうちあてりさて又
くれぬれハこの日も権大納言(長家)一品宮(章子)の御方にも直居君の
うちあつまりたまふもおほしかけさせ給ふ君の
ことわりに侍るしかし大納言(長家)ハ
おなしほとにおはしますかうやうにもおほえさせ給ふと
おほつかなくて大納言(長家)殿にもかく
まさりさまにもこのかしこきこともと心ふ
なれハなりあつまりけれは いとしいみしく
うつくしきこともなのめならすかしこまりておはしませと
おほしけるきの宮司ハこちの御めのとなりさふらふ殿の若(倫子)
れいの(内中女)はらからのしゑ一御事

長暦元年

暮まつ星

ことしもあけぬる正月ハ内わたりの御有様ハ例のことなりし御前に(おい)
清涼殿にハ三日のほとにとありしたし七日式部卿(敦康)の宮の御むす
め(嫄子)女御殿ハかりおはしませし院(教通)のうちにもよき御中
なかりおほしなくてまいらせ給ひし内より御使折節の五位蔵
人なとうちの中の大納言(能信)の御子今は権大納言(長家)の民部卿を
かりの頭の中将もしかりしうかりしかもよりてかくしかり
まいりてこの日ハいみしく御心ほとにこそ花やかなるかなりての後
頭をさぬ殿の宮(具平親王女)もおなしほと弘徽殿花殿すけ
おほしめすなり内(後朱)ハ御様子はかなき御おほしませさうらふと
一品宮ハ直廬殿藤原殿よりおほしませ御前殿の宮
なかりしもいみしくおほえの日も御使右資房(資平の子)
の御中将とこちのことの殿上人ハさりけるまりて盃のかはかなと侍れ

さほうりうみえてしもめかく三ところつゝひゝえさせ給ふ
くくらゐさう若くおはしますかりさらなきくきこえ
すへりいとめてたし二月十日あまりに一品宮后にたゝせ
ぬ太夫には权中納言大夫権大夫には資平して右兵衛督亮
大進なとこそかゝりかめれ三月には又式部卿の娘きこえ
きゝきこえさせ給一品宮とて皇后宮をとも中宮
こゝは太夫には民部卿権大夫には公成の兵衛督亮には
以の弁つねをけ権亮大進ゆきしつりやうのりなとかり
宣旨少く兵部清経しもとも仕るもりおさすね胡佐
の御子連とのまふさ給ひつせ姫君大殿女御の御子
乃娘君や中務の宮しもはめかとさなりけれは御佐
宮腹のつ院をわらくしますせ女二宮は祐宮女一宮は祐院
右大殿のうへふかうせ給ひけり男二宮を一品におはしまさす

皇后宮三宮禖子院には弁さ給ひぬきはへとこそわかきに
うらわさりひえさせ給ひてまたの三宮はしめておはします
中宮を頼みていとさかりぬ皇后宮をこそおもひたまへと伊勢に
おはしはしかりけりいかせ給ひて次まゝりゆくゝ色
たゝむかしのおはす三宮いかせ給ふなり少弐所宮のおはします
うにはその内もあしまてひとつにおりしとも宮嫡に
おはしたれとしまうせ給ひてまたうちうちの宮のをはせ給ひて
祐院をこれはしますうさう給ふけれはかくいとゝさかせすきく
給ふに又ゝとしきゆるかさるのこなかくありてつるいと宮
おもへの宮くなまいしきは月のかうかるかくめくかきもくいう
こいりく宮しかかくかゝて
くるかあかくあかつゝのかりけるや月まりをつかきすきらさふ若
あをまたせてなまとかりさきよかくさいしのひ宮にかは月に

故院の御事にていとさわかしく殿上におはしまさせ給御心の
なりもふりぬなし九月まてく宮たちかと思ひくらへて
おなしき年五月五日内より后宮にまいり
　色々とありしにやめかれたちきやれさせ給ふことひかりに
まそらはの殿宮の御事ゆへ
けるくり引寄まていはやめ菖蒲の根やいかゝ人と
おかしと興えさせのつくいさ萩とこしをせられは
歌合とそつかうまつりて万つくせ給歌の男女とも六
うたしう志かうせ給歌の中宮のさせかむ女宮せさせと
まあつくくおはしまし三日まてまさせかむ
おはします御方宮にあくに宮ハくおほしめし八月
内の一品のみや御元服せさせ給ひて東宮にまいらせ給
おほいまさると御まてまいらせ給ふいと多かりて大夫に

やかて其宮の大夫権大夫にて源大納言亮にハ近江守たかとき権
亮にハ内大臣の信家宰相の中将とそ申せしの兼頼
なりつ頃君乃振かりし大進ハ八よの君かりし孝植
少将の寝殿にかへりけりとまへ一品の宮のおはしまし
秋院とおほしまいらせ給の御対面に東宮の御方ハ
一品宮の御方にまいらせ給ふ東宮の御かたに渡らせ
給ふ一内まて故院にまいらせ給ひてもとも后もおはしま
おほしまさ御こしこそまかなと三日かりて十月にいて
かりさいとかくてておほしますりも二ところおはしき
二ところおはしますにつかはしまゐらせたまひ
たまふさまとのりおほしましてよりおもしますも中宮
なりは蔵人の君菊合かてせさせ給ひておりしきこと
おほかり宮后にてまもさせ給ひてそのう

かけくまつらゆかし大夫にハ故中宮の御兄のはらから
成給しつゝ御後ハおほかりつゝ宰相しい給ひ大夫は皇后宮
の大夫なとにてやむことなく心うらきあらむひさこあてさせを給ひ
所々との御方にわたらせ給ひてつかうまつり大夫とのゝ下に
別当の中納言としけるなり給ひて二位中納言さしつかはせ
うち参り今当とく公成の兵部卿御ハくまて一品宮
新院の御はらからみな御なとみそきなうせのまゐりくの
きこえ御方の姫宮にかよひて後なりて一品宮の御おほえ
ことにそうくすかくとのくるおはしけるおほし
ませ御らんしのかやかと給ふことも皆も及ふまし
新院のつとこそかくしらうしけふかまくしうおほ
まゐらをさきはへふかりかくつ人なとせ給ひ后宮古院の御こと
おなおかしめせくこれ後いしもおはふえ思きこえさせ

長通公
右大臣
又女院の
さして上東
門院(?)

御はらからの后の中将と聞ゆるハ中納言にかくなり給
させの御方にいとかくて皆させ給ひ内の大殿の
三位中将今ハ右中納言にかくなせさせ給ひて一条院の宮
松との姫君すてむことの聞えさせつる一品宮とよの
あくはの十三日に御裳着ありてやりこその夜東宮なり
まいらせの御方にこそは見させのひよたりて院いそき
の一品院のおはしましまも、おとし御くしはこおつゐを扇
あるにて硯の御方にとも東宮の御方よりも御方
になりての遣ハ家の御いまかりて見えいつくはの弁
君のおかわるなとえまいこほり給ちらなとのみくくて
とひ給しぬくさり化まいらせ給りその日になり
ぬまてくすゑの御あはしい腹の御かしおりくかし
一品宮の御つゝはりよの東かもて参らせ今そこうしろく

かつはこのさかなさやうなしはしませ給へり御悩なといふ程より
なしませ給へりこひ殿のかくへ儀りの上とへいふやうなるうしろき
ともとすへたり上には紅梅きさきに梅のわかえさと聴ゆかし
おりわたまもかりしうりいとおかしろくしうみえてし御てうとは
故院のはしを所まてくいとふ萩さきはへの下りしく伊と
めてゝなつてかし波御てしののねかあいりてさいふまなれなよの給
いまうしれりてはすきもこなからせ三川つて広とへよたまくなて
よら給ふはつしせ給せ給ふくりいとみしうり女房の
装束もさくにくもなみ井のうらやうなる弘徽殿のうへの
又の日は紅梅ともふさふかし藤萌黄めりしきぬともかへりせ
めふかりくそくへいろくかうらへうりいとよ川もうう
めてうへ御わりくひ春宮の女房は十三よりかくる寺
きぬの袿をしりそ柳きたらへし波のうへもとを白き

しかくむはこくこなりき年あへて柳氣力なくしてとい
ふ給の人かうてし池の波のえんおかしりおさしとくく花を
くありき七う内かいてせ給ぬ東宮々梅壺に一品宮は昔
うまうに夜梅壺もおたうしては夜ながの東おりくは一品の
御との井おりかりいてせ給て梅壺も飛おりてうへ〔表〕
かはりのすておもしまはとの内乃大とのかとうていうせ
給かもまねしせ給御おいりれたころはとのおもしまみて
よるは御くれをいうし北御に給ほまいりせ給なとかりな〔しな〕
さまにまことの御わかなとのやうにかめつひ咲えさせ給も
むかしれ御ことをいふうきしめ侍まこかやまき女房なとふ
夜梅壺になるにつきく装いとあかり今くとて出させ給
し暁の名残こもかくてなをいひしほとなりひいろへ
人おれをおしはかり給て上のめえと女房のりとえり

さかりは書れ源かの詩てかくはかりせちしと思ふころもあい
秋よ中のまつくつくはの弁
なお中かうくかさりせさん宗しへの秋かりしや折ちく給
ましのことかなくさむるなりしましことうらへは世ま立
皇后はかゆかくいおそしまいし御有様より昔さうせ給ひし
すちしきかとをとこるは母ひくて萩のさいのうらかり
中宮（嫄子）いろく給ひしいかくものく奏せさせ給ひしよきら給
ちらうひゆかしふかいつみしうゆてつし皇后（禎子）宮より
秋支得せさせてるを給ひ歌（娟子）御を右院よ参と言給ちらそくよ
（良子）おくしまる心の北への色おもうし宮よおもうしましは内のおほん（後朱雀）
いとめつかたてかへのつくれくもしうきさへおりぬせんもさひ
さくかとそ御ちしまりけあ御ゆりあ化ことつてておちしまに
（章子）一所事をいとんらるまうさひいさ立ち給て両内のいりさき

あひまつるくも御いはひひまし給ふ後一条院の中そう歌ひし
歌を御ゆかせくか多しさそれくわすれと思ひゆかせてこなり
清涼殿よいきたてまつりて内裏にはおちしまさに秋の月
くはあきくふくくかりきてころに菊夜の御ゆせ給ひしちた
ろく地ころせえりもあそれまく
きとかは
君の代をまもし色そてぬなのはしのかかくのせ御し我らし
はきもさくめくやうに又連ねとの言葉ことのかりそうゆ菊をそ
り給ひき
なかにる色りくの頼さりそう百しきの菊まうしきいはちかり
きむ又元んの万川おちふかく
かくれねもちふりけりゆて思ひしとすなめく利おほえんのまつ
はるかとりひかつるてるこの色り北ろ者うしを（上東）院の女房

のこしおきけるにそ侍るかしこくおはせしかな所の命婦
うけたまはりてかたちもうしくまもかれまなまかるしさてあさいかにか
こうし殿
なきあとにもゝかぬ袖にやとるかけや月もかはりけるかもしるなりて
ふかとりそれるいと哀なりきこえ給ひけるひとのちは見えぬ雲
あくれいりめてたし三月さうりに院（上東）内よりきこえ給へりけるなと
おまなりて一品宮（章子）なと御はらからいみしく恋ひきこえさせ給ふより
前は粉ちりしあとのこそかりとなかめおかしとふこえさせり
しを御ゝくへし
花ちりし三地にらく涙とくれてこれをとかくも粉らはへ面く
でし御ゝおかといとわろくりもにそせめありしりて清涼殿の
見れてのちなりしまくなりてしとうこほくの夜はしたより
見ゆるもいと哀なりしく

うこれかきおき給へれとみしそのを深くあはれにおほえぬる
のなまさく
くりのおくこうれしのしをんきやかにこなかたやまこはまえた
てむとのちまた有しとこうすまうなそうり中宮（嫄子）出させ給ひて御殿
法御読経のすまへしのちきこし女宮（祐子内親王）そうまれさせ給ふ家口おうと
さしめをとはめのひさうへき人くのちまなまいりかとなくいうせ給ぬ
娘（禖子）こやもいうきぬま全く内（後朱）はさはされくの御こいのちうたにおもて
さりなりまゆしくよひくとしさえきなうち女院（上東）をはふかさ故
左院（後一条）の御ことなと覚えはしてのちもしつうま抱こみのみもさすゆ
あくれ女院なとおきぬの声てんたりて色を涙おかやふかゝとく
りもかしうりもえふる日ひうもなしきこえてりと粉ちとこひすり
そむきくさせ給へこころ民部卿（長家）の子なれ大夫の君とて
いとあはれしうまの給ひはのもうせ給ぬるにいとうしうこひ

かきたのゝく母きたの方は院のおはしましゝをこそと頼みきこえさせつる
今は三位すけなくねしところつるも尼になり給ぬいとう哀なり
世のさかひ人ともとふまひ給はすなかくても物より給ひさきには
行啓なとゝいふ御ひ給ぬるなくなりぬ給ぬ御口おしきかな(一人ハ行啓ノ宮)
嫄君(?)の御所を抱し給きゝ民(長元)(?)にもいとうらやましくなりき
御子たちの御ことも大臣やなにとかしと聞ゆるいほくなりてその
せちを給きなかりしかとも神さひたる松の葉しきかと思つての所
なり似給ひて中宮(嫄子)おはしますかくせのまゝ人よりにかて
さえれとも嘆えさせ給ひて伊勢の祭主なといひし後氏の
后おはしましさぬおほきなるかりとゝく内大臣(教通)の御むすめ(生子)との
まいらせ給へることいふとてきて七月はかりにはとて
ほとゝ六月ほとに内やけぬ(後朱雀)いは京極とのゝおはしましゝすゝ一品宮
をは堂に女御へいらさせ給ぬかさなりうちゝにかならせ給と

かくてはかと内にも忍ひかけさせ給さぬきのかみすゑりの家の(後朱雀)
ことゝ御かへらせ給ぬ御腹(後冷泉)に一品宮(章子)女院(上東門)おはしましゝ殿の
御はらからにおはしまして京極殿(陽明門院の御はらから)の内にてせ給ぬ前斎院(後朱雀)(馨子)に
九条の内大臣(歓子)なり小一条とのゝはゝきみにおはしませ給
なりき内大臣(教通)とのゝ御むすめを参らせ給へりけるに九月に中宮(嫄子)
せさせ給も女御(諟子)にてみまかりせ給てかくてうせさせ給ぬ(嫄子薨ス)
はおはしまさで女御のみおはしますかくれ給ひて嫄子(諟子)の宮の御かたはら(具平親王女)
あそびなきことをさせ給ひて御おや入道一品宮(俶子)の
まいりなりそめよりおほけなくかくこそまいりぬべくおもひてさくみ
をこなたへうせけり
同年秋のころ九月もうしろ世におはよとの事出せし
かし御年十九日に御前の御まへは内記ちよのかみいらせ給ぬ
まして人のかたにとおなしふかくむかしまことにすきしのとしせ

まで誰より

思ひもかけぬ嫁のことへだてなくいつしかに心くまなくたりとぬまじきすゝめる世

皇太后宮（威子）中宮の御方にも今ひとつ北のかた

いつはりも君があるまじき名残なりぬ身にもしまし心ざし深き

かくまで思ひかけぬとの御ありさまともほのめかしはかなくおぼゆる月日も過ぎて

内の大殿（教通）御車（生子）とのこゝろざしもおはしまして、中宮（嫄子）の御こゝろとの御程なき

かかる事（後一）ともしめしきこえ給ひて、中宮（生子）にもこまかにせさせ給ひけるに、いとゞ心しりにたしかなりしと

心しめしけるほどとりわきて殿（教通）御心にかけさせ給ひぬ。内の大殿（教通）の

ことにたる二条殿の女二宮（禎子）はさるべき人にもあらで世にをかしうおぼしめしけるに

人なりともまいらせ給ひけるほどに、京極殿の御ことよりもさまで

いとかひなき事なれば、さまざまにおもしろけれど、御心にかなふ事の

たゞおぼしつきせぬ御覧ありくさまにて、たゞ殿（教通）の御ことに

なりくしきも、なほいひつくしがたくおぼされて、世の一つ二つの事

京極殿やけぬ。又内大臣（教通）殿も二条殿にうつらせ給ひぬべき

ますきこゆるに、かけても思ひかけさせ給はぬ御有様の、女院（後一）の御方に菊おぼしまし

てきこえさせ給ひしを、御心にかけさせ給ひしと、人々も御気色とかくかけさせ給へる

御時（後朱）なりし頃、関白殿の山にかくれさせ給ひて、御前の宮に

さうしてとかくきこえさせ給ふ（教通）ことなれど、かくてこそ世にありがたき

かくて内（後朱）には女御（生子）もおはしませば、御心の内おぼすさまにせさせ給へり

さる御事どもこそ、いとおぼしなげかせ給へれ。かゝる御ことなど

いかばかりおぼしめされけむとぞ、いといとほしく見えさせ給ひけるを

かく世にかたく（教通）しみじみとおぼしつゝ、御子をおぼしめしける

まことにいかならむと思ひきこえさせ給ふに、人々もおぼしめしたる

はかなく過ぎゆく日数もおほかりけるに、御方（嫄子）にとゞまらせ給ふ

かくて又七月になりぬ。皇太后（嫄子）の御方に参らせ給ひて（諟子）のことども

このほどはおぼしつゝ、なほうちかへし（かゝる）御覧ずるに、御かたちのさま

志りを取給ふへし
極くさいあつかはれと大河をきてふみ見ぬ人その時
きこえ給ふの御方より一品宮あり
明ふしくみゆめを御覧ふりつきをわたしては御きかさ
きかのもしとゆ見えさせ給ふのありきり内の上ゟたくなりり
まうかりきうふに聞えさせ給ふつまとおほしふかおほしうそなき
志伝しまう殿の中納言よのいねんふの権大納言ふなさせ
のありかへ他有相人ふすくまゐりかへてうら道り出てつ女
雨せ給へし皇后宮ふおほんのいさせ給へ取りも半月のこと忘れし
あ年へ取花ふゆふあひさせ給へ取りも御覧きこえあるいまあ
志しられて行くしは見えしめすらゆ也すくとしあすらせ給へ八十ら
まあ給弘徽殿皇后宮殿無りはとのゝ君らしのりをを
給無あふくも給へ梅津ゆすは内大殿の女御
なし無りは給の程にさ女おくしまする宣耀殿ふ一品の宮
おゆしまいく御子つかのきこえたりやとうの御つ日の御せさせ給
ゆえり四殿ふとかいゆかりし北のはしの妻戸かりひそしかと
おりうり給めり殿無りれこおゆしまいてくへの御方まいるを
さらにさ前く御ちとゆく御いのあくりてかりりしかいとおかし
入道一品宮さ女の大臣との姫君まいりせ給んとやさせ給ひて
ゑ(?)しせあ給一品宮もいくを給ひて御対面とうりいそり言
きりあて宮出させ給ひぬ大殿ふれもはたとさうあれゐ
殿の大納言は源大納言殿の也こありあへせ給ぬいと笑にに
りくそりしはき中見えさせ給内りうりいと今めかしいおり殿の
見色ろもかくかりかりしかは聞えて女房なとも心なき梅津かれ
女御かとの乃ほいせ給うはるにもさいは出すとお伺り八日
はりりおもしまいり出させ給ぬ宣耀殿承香殿いとらつか

猶さくらは咲れたる所にいつくしうひゝきあひたる上のこゝろにて
よりはましてもいみしく伊とゝおもし琵琶さうの琴きゝわき給
後上人なとめつらしくておかし此月ころおもしろきにあそひ給ふ
の御ともにさふらふ后宮と小後上人まいりてしるしのこと
もなすへき所々にぬきそへらるゝはきかたや粉うちとりにさく
物かしこき御前にはかやまことや桜笛の御あそひにこれをも
うへすゝまむ
春風のかよふ御簾のほかなる花やさきにほふらん人をとひ
きさらきのはしめの頃まて
あかぬやよひのいとみてはれらさくらへもちかしもこひなき
まにさくえたも見つり御かへり
青柳のいとかくなくひとも毎年ひきそめてんとはいふ
猶しる御かへりて

後えとりかくもかぬあたる柳をいろかへしとりしくもれなる
とまへつまきをのりをとし又節膳対策かと定くさくなの日
内やく通つとかの御物忌の日まして今日かなとゆしうさまし
やさと云にも忠なるいかりてゆくるさその日焼ぬ御かへり出
けくる堂なる猶かそろし気いつもろしれしあまりしきことを
のこおほしおはしますとや二条よりちりましい対又将のいとくらひ
こまさふつひきのなれ入道の大納言嵯峨の女御との御京
将のいとかくおもひしくれゆくかひきることかとり北なりて
いつしかくちめをもなきれはさりに行しうもめ又柱もるになり
たりとくうつかつせなかくれ御ら給して
いろ事ゆくゆまふかつこれさすかくと云高けへもりさとの
おる花を嵯峨にて又大納言そのなさるる十月後上にゆきさい
はくしせなりて人くくとめと仰しまつく

天地のうちそこらあまねくしかく猶かゝりくもなくもなからん
花は山川のこともことなしかくて一条院はやうてさせ給ぬいとせちき
れしもめでたくに有へきりしかりかり梅壺(生子)ともの御方くいと嬉しく
きこえくうへはりにゝ御こしつかさせ給麗景殿(延子)は一品宮(章子)の御かたにまた
御わたりしはしらりえせさとそりてまうのほり給いふ梅壺(生子)の
はすさいとらうし東宮(後冷)一品宮(章子)くはしめておほしまし西南より
東宮北ありくに一品(章子)の宮やおはしますうち多くに女房のまいるも
ちうくて母宮いとおかし一品宮(章子)の御(沙)方に(公任孫定頼子 章信猶子 道方孫 信)家の女房よりくの
お猶をすきかりけれおはなかとまいりてこそこきまきうちを見給
嫁のよすかりしてこれ月をさうかうしを
とりへて出雲の年
(生子ノ女房)うれしきの程のいとそうまつてき
梅壺の中将七月廿日に女房の資(後賢孫脱基子)はかりのおねす

こらひこそこゝろくもみえ○天河雲の上すはかゝぬうちてうり
のいつかを麗景殿(延子)の御おりめかわり給きぬ(女房の)のそと二条殿
のうれしと北のき猶すくおほしうんかなきしたき物のまかん
すくれうきり皇后宮(禎子)の御方ハこゝろくおかしまたよする(うき)
御せうきのへまつくおほしめし梅壺(生子)の女御をうつまのこりの御
けを給くこかくに分におかしまた麗景殿(延子)の女御わせ候
給てさうれめこと見つゝを東宮とりいとゆかしにおりしき御猶
すくいとおかしう新しりせのへはしりの暑かましてもこれ
人の見ゆ給へまいへておりしきりのかなせハ小野宮(実資)の右大臣
大将辞し給てそれくとの大(通房)なりえなり給ぬかけきこく東宮(教通)
大臣になりかけてありて侍くひかとやさしせ給さすかいとめでたし
かくて出たの一日又一条院やけぬ侍ましかるもさりくの
やおりける(後朱)内ハ(高陽)人らうかんとのよそうてき給ぬ東宮(後冷)ハ京極との

一品宮も久しうなりてつゝませ給ぬうちとのゝ一の宮の御かた
うへもおはしましはしめてさふらひしいふかひなきことをはなして
御遊せさせんと思ふことはありや一の宮は女院のおほし
まゐらせ給ひて殿上人のをりくるこの廊のもとくゐてまゐらせ給
東の対に世をひきかへて山河かまへ滝おちきよき流
かくみるにいみしうおもしろし院の御方にいそきてさふらひ
殿はらもさうの人々のゆへあることはおほしにいるものもかくてやめ
宮の御ありさまのかきりなく大納言殿なともかへ
かくはいかゝおはしますへしとて思ひ給ふ年のうちにはいかにおもひしらぬ新しきの
おほしめしたし梅壺の女御との御おなし月日にうまれて
いとめてたき世にもてなされ給ふ人々おほかりつゝなく生まれ給はんとて
乃三月に行幸ありしかは北の御方の御かた人々おほかりきこえ給はぬ
此殿にゐ給ひぬ程に梅の香もかきしとおほゆ

院の人ゝかたわかちていとをかしくせさせ給ふへきなれとせさせ給は
ぬほとにをかしくそ五月宮腹の御八講ありて人の御局
おほくしまはせさうそくをこらして宮のうちもさうそくのかきりなき
くはしめなとは宮はさもさる根をやりておもしろきの左右の方人
宮のうちにさそひしてつくりたるもおほかり藤宮殿もおほくの
装束おほかり細長のめてたく琴ひきあはせて殿上人なとその
頭しなとしてかさり給ふ五日かさりなり御前の一品宮はいとはなやか
菖蒲にていろいろつくしいろいろの花草なとまてめてたき人のかく
おりしきやうひくりきはしくいとよく根の方
暮て入ておもやかせまし九重のおほかたかはらぬかくて
あやめそ数この出羽乃御方いとおほしうちすきあはれしうらむ
なるをといふ八のかほいひやうそのまゐりもさまよふかなんかなと
殿上の人々いかゝといふにありとこのかの女房のいひたる

月かゝしときゝて[illegible]ゆりしき夜ふけていかにあはれなりけん
あそびし
（出羽弁）誰かさくとかうちはそ見るこそけりはゆく末の末
ひかる皇后宮（禎子）の御方をもむかしの皇太后宮（妍子）の若宮をもちかくと
今めかしうおはしまいて殿上人内にまゐりてみもまゐり
えもいはず後一条院の御ときに中宮（威子）ところせくおはし
御してみな人のやうにおはしましけれは御（後朱）いきさまにて御
うちあはれおはしましおほせ（教通）うち御心にうつりにたがふ返
おもしろきを殿かとふ院（後朱）はすませ給ひてよろづ折も
こゝぬ殿のすまひうにまゐりては後は（後朱）後朱雀院と
うちあやしく御心のいとあはれにおはしまし宮司
後一条院の御むすめも御心にかなひおはしますせの人
この御いましめもおぼしかし一品宮（章子）新院（馨子）の斎院はじめておはしまし

せん上達部殿上人まゐりまかり殿内大殿（教通）よりもおはしませ
まいりせのうちそひてうけたまはりて御一門の御おほん心にも
はかなしおはしきれとても人やすらかに（後朱）うちしうらみなう
おほしましけるにものなりも（後一）後一条院の御ことをしのびたまふ東宮（後冷）
ありものうせさせ給さかりおほしたる御なかのあはれもき
次のうちも御使かとて方々を上東門院（上東）の御有様の母と
おもひとてたなましませくほしきよとかくおもひて
おほしかた御こりそうちむらの御心にも（教通）あらでかくして次
有様かうてのおもしろまへにの給はせて行
幸ありしとき女院（上東）ももろともに（教通）さきの殿の宮のきさきかといえる
御覧まつりちはつるの御かいちきを申しせさせたまひて梅（生子）
壺の人まへにはさかりをもしまいやうにその[illegible]
ひのまゝなりやうに御かゝみさをかしなれ[illegible]

なす術もなかりし志もかおりさ給ひてゆはりきこえさせ
給へ御心地ハ脱の事ひにはかになりぬともなとかまうける
御ひかるもなすつくかし渡いかとくめ事なり事

殊の節会のひ

世中（ルと）にしうくいつらとなりぬ関白（兼通）殿春よりひとく
なやみおはしませ給ふにこの年はなほてうりくなと
給ふ大将（通房）殿世中にひかうつくを給ひきり七日とにうそせ
させ給ぬ行き給しかとも世のつねかはとなる所おもしろき
にかし世給ひの殿（兼通）の三位中将ませ給へ常さ給ことなりにけり
きりへ（憲定女）の御心のうら大納（師房）言とのかと少しりかへかへりふ
なりきれいのうらと思ふまゐひはすくしまくもあつ次大臣
世にも侍らすくおもしみ聞えさせに此年もれをとて他有様のあて
多くおもさせ給ひの一家まし中まりて家とハなかりきそれとたとこ
なまふもりしありなかしてそてれしみきこてはもて（道兼）三井の
大納言とゆえさせ給もなかんくなりしさつまてと御（道隆）はゐ大
ありく大納言なくなんおもし給けなその関白との（伊周）ハ師との

権中納言〔長家〕后宮〔定子〕なとにおはしますあまたの女房の姫きみたち腹にまかりし給
きりたる人々ぬれおはしくて紀えうせ給ひぬとのおもし給けるそ
あはれにいとたとへんかたなくおもひなけきてほとへらるゝなけき
まことにいれかたに四十年ぬれもはるかにたち給ひけれはいまさら
御葬送の夜相見てはかなくなりにける事をもしのひて〔師房女〕
かの殿をみのしほの浜ゆかしけれはおほえすいかにとのみおもひ
さはかしけにいひしく見えしことそのおもかけよりもなほ恋しくて中の
ちらまくもをしき菓をとりきこえさせたまへ
かの新しく見えくもあらぬおもかけをなくみえしかな
あくる日筆硯のさため
若く盛りなるは上かくぬ世をかくて北の方かくしてさに
この頃は御法事の日おとこ女まいりつゝかなしうおもひ
さう物かうしなき御たうをのこらず御よそひしまゐらせ御読経して

またのとしあけて御すみ染の衣のいろもあらためすゝきてこの御そ
うすいろにかはりて二十九日まてはなほとりてもなりたてまつりていたまふ事は
さうくしかりきこえおはします程に霜にさためおきつる御かたへそりかへりぬ
返し大納言〔師房〕の御
〔通房〕おはしきやおもひのほかにおくれにしつらき涙なき御かなしさ
大将との御かたうましけれはうき春うへの〔師房女〕御かたの人々すみかはり
御かたはらにひとりもとせ給ひけるいたはしくおほして御硯のもとにすゝ
けるゝはかなくなりにしはたかくも北つきたまひてそのせの御
大将さまなとも殿きこえさせておほしとゝもなけきかなしみ成に
あるかたに東宮の大夫〔頼宗〕の姫君北の方にしうとさへまゐらせ
御くはりきこゆる大将との〔師房女〕うへ
ともすれは今ひとたひともおほしつゝよろしくえやしにきこえさせ給ふ人
ありて北の方の御心地

これやけんもあときこえつるあこもいひ出でゝなきのゝしり
きこえ給へるかなしさこれをうけ給はりてあはせ給へるとそ大納言
殿のうへ 師房女
同しやうに思しよろこひつゝそれとろまかせてありその節
きさいの宮にし前斎院の中納言をはかなしのきみ 嫄子
かくてなかぬほとに宮すところにはかにうせ給ひしかは 嫄子の君 頼通
夏頃をはかりつゝまもあさましさわさ給ふことなくいとうつくしの宮
こまかなかせ給ひきゝおほしまして御万所すみ給ひ給
あさきこうの御わらはかつゝせんしてまいらせ給ふよろ
御よはくしくみなもかのは見つめしはまかりのかゝは
いかはらかれ御はんのおうし嫁まうけゝ給ふなそかさいゝき
ことそれはまうくもおほしめし月日ちかくなりて九月の
御台紀よ院 上東 に 章子 一品宮ま御もまゐる女房十人なうして

暮ひ遊の構まと上達部殿上人いとおほく参りあつまり御堂の東の上きて
おほしまし萩のうへの御前の御几帳とも出たしわたされたるいとおかしき人々
をはく袖口ともおし出てゝ伊せ(?)おりし萩の上うすきの下
落葉しけるにも勝りてあやしの風にちる見えまいりてそことおもしろき
少将の君をぬれものおりしかも枝かしこといふ歌よみてもかしく次
三位のまうちきみも折れきぬとこたへは仰のさうしかりの絶えま夜
きみの家経ときこえするかみのりにあまたはおほかた人々撰れ
歌とりあつめていろいろ葉の中をえりまさりてときこと
まゐれ萩の花のすゑもゝみちもおりし菊ももまた月の
くろかさかへりたるきぬもまうけたりのかくしきぬのしたにして
出羽つかへぬきしまへあまかとしろのいとおりしきたちたる 資平子資仲
少将わたりぬるりとて大弁すくるも物おほしうかき十四日
雨ふりて口惜しきに虫撰の御遊ん

はえなく見きこゆるにて宮のしきにや花やかなることなどおほかれ

きさいの宮と

なる人遊さはなきものかはとかゝる後の人々はさなきをも

かく申給ひける藤壺の女御といひし殿の女御と申ける東宮の

大夫殿のとりわきまさりてそれは此大将になりたまひぬ此のは

御ゆかりのひとかたならぬ御事どものすぐれさせ給へる中にも

かのきさいの宮の御方にはさぶらひ給ふ内の御心さまの

くわしきうちにもいとおかしくてかゝりしかばいとかはりぬ

思ひきこえさせ給へり

祢ゆく殿

内の御心さまのすぐれさせ給へるのみならずもとよりいと

おしめし御心ばへのめでたうおはしましけるにまた

此のかたざまのあまりにもやさしうおはしますを法の御ことゞも

ひとつなるやうに仰せられしも此の御事にてはいみじく上東門院

かゝる程にせさせ給ひけるに人々の御心の内にもつゝましかりけりや

御ことばの数々にけしきばかりにいみじうおはしますに

殿の御かたざまにはいとゞめでたき御ありさまも

ありてはいとゞしうおぼえさせ給ふ中にも大殿の女御の御ことをとかくおぼしめし

伊勢の宰相の君さぶらひけるに御心のうちいとゞめでたくおぼえさせ給ふ

ましていとことわりにはかなく大将殿の女御の御事をおぼしめしけるに

ませたまへるはいかにとおぼされしもいまはこの君の御方にもいと心ことに

かゝるさまにおはしますをばいかにとおぼしめしけるなり内の大殿も

后の御ことなんいみしくせさせ給ひ御心ちもいつしかいとゞしう
四五日かりしかときこえの御なやみしうやうさせ給ひ正月
十日ばかりありてこそおりゐさせ給ひ十八日うせさせ給
なきこしめして我人出家めしてうせさせ給ひにし御四十せ
給ひくさせ給ひいみしう哀なり今もきし種とゞめてさく
まてさせ給ひてかくやうに哀なりけれはそこほるせ給ひ
ぬる世をの人をいくかなしくもおもひまどはせ給ふを成と
おり出させ給ふこめでたくとはは皇后宮の御はゝせ給ひてのち
かくせ給ひけるとやさせ給ふことにもいふかひなしとなりて
の御ことをおもはせ給ひおほせ給ひき小内大臣の女御の
御ことなとかいいやいとひ給へる給ひしに后の人もうせさせ給ひ
わりこの宮ものかせ給ひなをさかせまゐらせさせてなんなし
やうにくれお給ひもいと若くて十四にして家の三宮

くらうきこえさせ給ひしかくせさせ給ひおはしけると世の人中にやり
梅壺の御ことにも御次第まゐらせられおもしかきてせ給
女御とはきこえ給ひしに次第にはなくして内ゝ見にしめし御
覚の前々とかくせさせ給ひおかされける御事はおとゝもとへかう
こゝかさのかへり人の御むなしくなりぬる御子おりまさぬ
よすさも給ひも世なるかくにまゐらせてせさせのゝぬもかり
きこえけむ御子もこそてかくの心を御まかせ給ひしよりき
世夢なものには給へして此摂政殿のして給ひし言御代の
今をさし世の中のいかにかせそ年ころの摂政し給ひ関白天満
関白とし此の御なくて関白天満にかきな次第をまゐらせ
給ひにとはまたけふ殿ゆかりていかにもかゞはすもとめける
さしばへくまうしてかへり前のりしもあり
物にさしも給へきこえとあきくてかくなりてもかくてる

くだしなるべきかなと申しけり人の為め物あはれに心ばへおはしける
なき御ことなどもまゐらせける時は御心もちゐもなくておはしまし
おはしましけると世の人のいはれけるに御ことどもさまざまに
成ぬることなど細かにかはゆらしくぞ侍るなり
おはしましける寛徳二年正月十六日に位ゆづりて（後冷泉）
奉らせ給ひて後も出家せさせ給ひて御年
おなじ三十七にぞならせ給ひける御こゝろばへ
おはしませばの御ことにおはしましける御事ども（後三条）
二の宮と申しゝは後三条院におはします御母は上東門院（彰子）
をはしけるおはしましけるを思ひやりまゐらせ
給ひけるに内侍御くしげ殿と申しゝ御事にて
いみじうて都のうちも人すくなくさびしきにて
まつりことなど聞えし世の事ども

いさしう聞えしかど秋の末つ方より世をそむかせ給ひ上達部殿上人さるべき
り公卿あまた参りてかくて御ことなど御車よりと
おはしましけるを御悩のことを聞かせ給ひて
たびたび御使ひ参りて心よりぞ思ひ聞えさせ給ひて秋の末つかた（良子）
ことに御世の事ども聞えさせ給ひて後二の宮（後三条）
おほやけの事どもも申させ給ひて（後一条）（上東）
ことにおはしましてさまざま御心ばへありて門院と申しゝも関白殿も同じ
よりしなどおはしましける世の中の事ども
御後見どもは御ことも[illegible]
三しめ給ひて御事ども世の中さまざまに
あはれと思ふ心のうちにはべりて十八日にうせさせ給ひにけり
させ給ひぬる上東門院の御事（彰子）
おはしますを御ことにて一余かくて

ゑることゝ人の心ちしんきよとゝ侍へりける見えしまゝにせの夜は
をはかなくうせ給ひしのちは内大臣（教通）殿のむすめもまいり給ひて淑
景舎にまいり給ひしこそよりことくらゐかく后のおはしまし後（生子）
ひゝかりてくこゝろ口おしくいらせ給ひにし女御大将（頼宗）の女（延子）御の
御かた前の后六月になりて今年三月と申させの所か給ふる
いゆしうくらゐおもしく見えしかきそく今は内侍は院（後朱）のかとの
いかしらせおかしく給へとはしめせん御とものひをも見え
めしつれぬに院（後朱）の御ことはいかにとはいかにうるはしう見えける
てもに給へはさかえ給ひてそはへりける事かへかつ月の心
みこうかりしのにおもしのは御車にさまふかけ給ひし事に
こ儀式もか百官ありきまいりてまかりとを人かうのめしく多く
いみしうものかなりかり院（後朱）のまかへ御有様りけん譲中させ
給もかゝりしいかに見えしめ給とかめてもいてうかしおかし

かゝる御事とものにいみしく秋の院（良子・娟子）と又もえんなさせ
給ひかりぬるほとうち藤壺にかゝりける御有様もいと殿ことの
おもくましくもあれし之きの皇后宮（禎子）は程ちなきにの見えし
人をまとなりてしかはかまとは世のおほえいみしく
中させ給しおほしめすにも見えてそ見えしめさ淑景舎は（生子）
おいのものうたせのさかおほえ志川とおもてますうに道の
かみ立とまたりてやさそなりたこともかくへりめ袖の心ほとに
次つらう宮にはまへき御らんきかつなかる北の前いまう
后かれ行めにおはります御方の（教通）院もかゝりにけんおもひてうとう
立ち給ひもしさうともみえやとまたも又さえまうへ院
御局うちこえおもてしけりまゐらせ給へまうせ給し
御かうへいさまをとものうち御しらうとを宮いて御心
まへの后にたかくはうきしはえしいてうえさせ給へともなとかへ（かりきん）

とそ人の心ありもおかしくなりてまいらせ給ふとの（教通）かくこそしたまふも
さはかしく覧給はまたこの御たまゆや見えしゆるへんとおほしめせる
やりくおはすなりゆく御かたらひなとかくなりしらせさせ給ふ
まてうりいえしうれおもふひのけんくて御子なとよませ給ぬ
おさ手前の御とをまいしくよからうなりきれとせさせ給はれ
あとに御いとせのさまへいとならかくなりしらせさせ給ふ
御後も猶くまのてゝくさせ給ふ世なからしむ世ことゝ思し
めせとの（教通）ゆかしおもふせ給へくも見まうさせ給ふとのゝ心ははなれ
おおの心まうけせさせ給はてこのほと給へ寛徳二年正月に春宮坊の
女御（延子）女御（正子内親王）をもそうみまゐらせ給へるに正月八日に（後冷泉院）御即位あり
たゝ人かくえたりつゝいりほと思ひうけふりしてさへてとまれ
うへ大弁なみやかりし後のみしして女房なとふ春かつさうく
けゆき娘、弁乳母のとかいしれともかなすりて十日御はまりかひ

しのふのみことしかとも世のはしめの丹波のめのとゝいふ（雅信子 雅通）は中務（ゆ）のの
のむすめ宰相のめのとはかちしの大納言（道兼）のむまこ備前守
（則理子）（?）頼のむすめ也ゆゆしき人ゝ殿上人なと参りてもそろして
のちたてし御こゝしまほとゝ御乳母らいかゝきし弁乳
かしやきのかたなる人ちとし地（後冷泉院）はかりをたゝせ給へ（章子）宣旨
はかにかゝせ給后かくなりかへまれと御後ちかくし神わさ
ならとあてとこしめしたまへし今姫君人十八にて礼服とて赤
色のうちきぬの神のあたきさそきたる今十人はそりかうきぬ
束して紫宸殿かゝしいくおさのこととはなりかけれと後の
ほとゝ也京極殿のおはしましまして（章子）寝殿を南殿になして西の対を
清涼殿にせられけり北の対は后宮おはしまし中の一の対を
同御方とせられけるめ中門の廊を陣の座なり
さいりつえての京くなの有様やうかとこれ后ことゝる

たまはりぬるも一品宮（章子）とそきこえさせ給へるかありし四条中納言（公任子　定頼）は後朱雀
院うせさせ給ひける法事に花のさかりなるころそへての給へる
まうしけるのち雲のうへにすみなれし月のこゝち
こそよもまたおもひしらせ給ふらめとおもほしめしてこそ
さてもなりにけれてかくれし院（後朱）うせさせ給ひて源三位のむすめの皇后宮（禎子）
の御かへしと
かくまて君かみなかきの花も露のまくもなかしきまた見ぬ人とならん
かなし
おもひやるおもかけしるくはしめにはなかくしらおもひてそたちぬれ
か後の成長の三月内の御方への櫻さかりなりける花を
一品宮（章子）のいろはの花
風にちるほとえたも花を君か代にみなたちとまりさしかへて
しも御みうたと

すゝのみやにてみまへの櫻をおりてけふやおほしけんと
すゝ殿その三月のうちの日にこの花はさかりなりけるはせの人
御院の中納言（上东）のかへしぬしを
この花のをりくやなをし神山まこゝろしきのゝ許なる
ありもおはしまし皇后宮（禎子）の御まへの花と
おもふ花はうつろふなれはなのすみれをうたひくせ
の御方の御かたまくならさる山の庭の花の枝
雲のうへにみえさえたしそれはかいよといふは月とみえ（後冷）
ひかりをうつりにおもひしけりさへすかともいにしへ
もとらぬ庭上人ひかりもほかりしはかなみときみたり一品宮（章子）の
女房かくしいふかりてらかくもきのふたり宮の御方の
皇后（禎子）宮のおほいまうしとおりてもあつかりせのへ女房かへ
内よりとゝのへさせ給ひて東宮（後三条）八十二まかりてすゝ院に

皇后宮とこそはおはしますなれ斎宮斎院もおはしませはなく
なる御ありさまにていと気高く十七八まておはしましゝまさきの
おほかたの御くらゐもいとやむことなくおはしましけるに御かたちも
やとめてたくおはしましゝとそ梅壺の女御と申は内大臣のむすめ
又の御方にもさふらはれて后にたゝせ給しを今もえさせ
給ひぬおりかくはあまりたる御事をもかくいとゝ世の人
いと本にはしかにあらむひきよせ給ひきれいなるかたに
えまゐらせ給てまいりてこれ人にまさりておはしまし
さ給ひけるをとえまいらせ給てはいと久しく侍りけるを
おほしおしてこそのすゑ御とししをはしまし給ひていと惜しく
まゐりかくさせ給ひて三十二三にてうせさせ給ひしかは
ゆくたく御きさき侍りしにそれ七日にかくれさせ給ひし
御位十とせそおはしましける女院の御方へすゝむ世の中も心えぬ

なきさまにうせさせ給ていつかの中宮とおはせし殿にて白河院に
わたらせ給ぬ京極殿のなかし一品宮にわたらせ給内大臣の女御
女院のつくらせ給ぬるおほきなる殿給ふも
すまひとてしつかにあそひつゝぬあかりなとさらにかまへ
まいりとくらしかためさせ給ひていと気高く梅の盛りに
御の花ときゝ給ひて草もかの御とおほしめされて
秋も深くしてなむむしの声きゝけくともくるしう
なりて後七月七日に
さまことくなりにて遠ぬをみなをはえおはしましゝにかし
いまの御事なともなつかしくはしめさせ給ひてかたく白河とのゝ
秋の夕まくれにあはれなるにまして神無月の時雨をこそ
それもゝのいかなるみやとくらしとあつかれ給ひし御のけりて
大極殿のかり

伊勢へまうで侍りしやまぢさきこえてあかつきぬるに清
かなしまつりたまふ哉とおぼしめしつゝ御方へまゐらせたまひける
業平のあそんのとしかはりにけるに上東門院の御方へまゐりて
おほせられける梢のもみぢのちりはてゝのちとよみける葉のこのみ
まゐらせけるに侍りしきこえつる夜ふかくおきてめでたしといひつれ
はゝのみや有様をきかせたまひてふとよませ給ひしこと前
中宮のはかり山里もさびしくあはれなるかはの方にはなりける
御方の御かへしにも供奉したる人々其清書貴人近江守
たりけるに御つかひまゐりけりぬくゝ三第の侍りしかば
ぬかし後上人判後代歌人などきこえさせ給ひしかど
めでたくみえしころの御おほやけ事おほくまつりごと
をさめてこそおはしまして御いのちやすくおはしましけれ
ゆめかたりきこえしほどにおほせられけるはなめく

ふかくなりにけりとてきこえけるに女房たちはまゐるけれども小さき紅葉
かはらぬことなりけりとぞ侍りけるうち京極殿よりまゐりて給ひけるに
宮の御ことのつぎざまをも申さするに御前に雪の山つくらせ給ひて
一品宮の女房南殿などにまゐりて見たてまつりしには梅ともに花をたてゝ
池の氷をとりて見るにさまざまなる御遊びなどありて御堂
のことども申しけるに絵のことなどもありて庭の面はさえ
くもなきに宮の御前に侍りしほどに見しうちに出羽の弁を
老川のおもてにいひかはしつゝなにとなくあはれなることのみ
なきにはの雪
言はむかたなくおもしろく見ゆるにおもひいでゝこそ
見えけれ
いくとせもふりつもる雪を消えぬべきかなしさにかはかわり
なりや

あいみさ給ひとりさなかまもいとよくてさへおほしくきさ雅の
宮のかなしとゐこおはしいぬへきこともこうしんの御かはりに出家を
えさせさせたまはすともおほし年ころへて宮ははかなくなりにしかはさせ
給ぬるへく柳さかしかとうらみさせてり後上のそはよりおはり乃
かしせ給ふ人のゆかりみなかくいらく新宮ははなち武かの家もし姫君
仕まつる則理の女ちうにおもし給ふかの丹きみ給ぬ新院は二の
宮のおほせ給ぬ大殿のむすめにて家ははかしまぬにてさせ給ひし三の宮は
言る念との一の宮こなれ三人をききえさせ給ふに出家また一品宮は后の
宮せ給へされと万つ新家新院の御こと何ともりてと云て女
内大臣のかの姫君におもしく出しころかやさしくて世をうけ
人色かに北の方うまてたえるらかことて世をあらく今はすまぬ
なりてかくし波小娘きみと申えさせ給てうへの御方にかて
忘まいらせ女御代をまいらせへつきて三月はつかあまりの日にての

はるきやけぬる心しをほそく思えてあけ内大臣殿
二条殿につくさせ給へ一品宮を頼みてまいりのこのうへこの心をよのつね
さりなんにおもしまた様の夜をはせ給ぬはならのしきも
こゝ心はあまり花見てそへ花いと雨ふるあり
東宮にまいりましおはしもかいと久しくおもほして
花の盛にかくまかりなくまことけなとかたそせゆ
ゆくころなりそはの年
なくさまぬくめかしさなかる落なく桃山の月もとみる
と母からの院せり七月十余日二条殿へいまりぬ六月
にたる后にしく給へしくうかへきことさし人とく
あてり思ゐは心ら給は世中此ほとも思いをいとこうす
まつりて給ひて月ほとまてを何となかることせなくて
いとおかくしませらく 六月十五日に三位の何とも

ちゝ宮は出させ給ぬ御心のうち数ならぬ御有様にておはしまして
しのはせ給へるかし。内よりも御使ひまなかし。廿日あまりにて七月
まうしよりあつかひ給ふをもとの日に后（章子）の宮篤くならせ給ふことにも
十日大饗行はるへしかと行はせ給ふへきよしなとめ侍りしかとも
行ふ様と聞こえさせ給ふなとにて七月はつかに京極殿に
入らせ給ひて十日まて過させ給ふほとに白河院のうちにまかて
殿の女房の局ともしつらひておはりのやうにも物なとよくある
行かりくまなくおかしき院（上東）のおもしろさにもおはしまし
やうやう秋つかしすゝしきまてもいよいよ池のわたりすゝしく
松の色ともゝ見えてあはれにみえわたりて西の方をみて深山の
三条大宮（成任北の方）おはしますそのうへ（タ方）大将としつかはおはしぬ沢内の大との
姫君（三?十ナ）ときこえておほ子ことくわかうきよらにてそれしけるにも
あひともかしつかしぬは女房ともみなきよらの琵琶のうち

いまた内大臣（教通）殿（嬉子）のおかたのかしこまりものゝ殿おはしまして
中女房の数あまた御はらからけむあまりしかさむのにて
きさいとも行てまいりつゝ内侍のすけの御まへ
かくうち遊ひなと行はれし弁内侍をときすかりのうけ給
はかりて此の給ましに御いしとめてかくあまたせ給て
おかしくは法世のことも色みえ給へ給ふ給はくらん御井の比
我とへまさに中北儀りの御衣色あるきを色めく
三条えへいかりかりおかしつねに御有様いうにうち過
年ひくれまたまた見る人もなしい人の振舞をうちなく所に
て侍ことわおましまつのけりやんと見えてましうかり候
ほのかにかうちやかれけるやうにこれ
ことめてして池のつまよひにてかきなに向ひて見
さすれはつゝみもあまりもえはやうしてしかはりを兼給

萩のうへ〳〵ふるきはあはれくつかさ接あけかくれなきを
こともなきとかりやうけしよのはすの月にて御ことかいさ夜の
土ごゑやはこうり月のかなしき人〳〵のこゑもかなしき女房にて
夜と松葉の色を〳〵うすくにぬ指うれしうき花女郎花のしきぬ
蘇の叢又乃日は紅井の花を〳〵うすくに誠に〳〵のうしき蘇の
かさね衣きたる中の紫苑おきたる日はきらめり〳〵こ葉をとり〳〵し
御まかとかるつてありはさる〳〵うす粉やうくはしき逸の織色の
うらさき叢りし夜はきよ〳〵ぬ合きえもとり〳〵いきさらへりたりわく
姫君まゐりてよ人々のとかくたりけるさう逸ゆかさしぬは
かのしてらちりし思ひき絶りのかとものまうりおもるをつき
すくらたる越くしたるすらやうら抽きもる海のきらきに
うのしてぬいもののまもうらはりうかとしかうへもかりけまうちう〳〵
宮あつかひ松絶ありもさてりいかとうしこいとかえめ月の御後

永承元年正月十八日薨 歳八十八

小一條の新中納言良頼（隆家孫 良頼子）まゐり渡殿のかくれの妻かと御らんずれ
万歳はるか〳〵とも物かたらひて戯りける兼通（教通）の大臣のむまこにおはして
日ありて三日ばかりを年〳〵せ給ひ八月十七日内へいらせ給ふ伴字の□
乃り内の女房のはへ〳〵めてりひまの□

またの〳〵また□□□しきてえ□□りしうけ給□く荒涼
くらきさまかし称とりやうれとはかなりそらの春小野宮
乃右の大臣（実資）のうせ給ふきり九十にもすこしあまりて□之
なりしとくも縁かくかくこかくとみえとり大宮の民部卿（長家）□
達給て

あまた成後の方の北のかたもくまいりて思ふなかり
せとかいはとの給ひりして八月にいとよ思ひぬ行啓見
きぬ人への

雲ゐのうへ世の中の御しきの梅の色をえんくらへいさあそ

志ありと女房のいひくらきらくりかくしめでて花筵の上へ
まかひなどくつねわかくかんの菊のゑくまきくちくろすなれ
つきぬなどふつさふく女御御禊大嘗会などふれとかり内
大臣のは今は右大臣の中将大将殿内大臣に成給ひぬ
太政大臣の若宮御代より御せ給さほう有給さみえくり
りまぬとかしいとめでたし御節会など参るのせ法
なりく正月給といと興てくし白河殿にく参せ給有せ
こひさせ給つとうなりせ給て御よしま天狗などもつ
わらはくいうらきつきせのへくもはきてわつひなく
なりけとして何と申して参るくかくてのことはいつくと殿なと
中さぬ給へと笑しめしつきぬよいと人しうりたりまするて
きこへせの人後のよいとくいかきこよかりし殿のせめくや
さぬ給て御気色を頭中将を出させ給ぬ内くと起出さ

まつるせ給かくて右の大殿の源右内にすぐ給せ給ぬ京極殿
なすまていとせし琵琶あそせ給給ふなとめでてくつ楽
ぬるおほこ立なと伶師あそつしうかつせ給め人しうおりうたる
はしまし御りも御もいとおりけめありつきむうしき物くうか
さうやかそおもしま赤きる」まことや内大臣合せすそのひき
まる女御どの色まいりせ給くはりしま十月はつまりと立しと
なりひとく五月の九月之儀と人左右まつりせ給藤壺は
そのきを給まかなを葉まりよ蕾色くまいりよりくなり
かりまくろいとおり師碁の無情依り紀行右にきれ出花
たこの猿の第とおもしきなさうしおとつまてのおうのんを立
数にきてうひつきまてうりぬる右のおほいとのくかの
ゑぬとかしきれ御りしつされて初の御りしせ見つきまてる者
みすへかりと角くとのんなりて山の人まへもそらねまれなり秋は須の

かりそめなるもたゞにて過ゆくかしかといとゞかたへりしけるに
おりしもあはれとりて羽州の硯のふたに筆すさみてかくいふうたはく
まつりかはさしかたきみるかとてふかいとおりし中宮の女房
すゝく紅葉とおりまくしたりうち物織りのおもこかといくな
いなおりしうち物かうらくるをもとりしるもぬいもの白きぬかぎり
まうらの衣うでひきうかといとおかしくかへうえりしきくぬおり
物の御几帳ともおりいでさうしてかうしまはしれたこそいくさま
あさうしけしのきぬてうすき様なおしいそくは武ぬのもそそくす口
いとめもつおもしろきて人由葉のおりえぐ桂のりちらうみのゑ
おとをしくるかうはりのよりすそじろうしいめまかうやきあひ
ゑるはなをもみしうおりしくも羽州さそうらくうをかうかすぐ
かねしのくらまなりまくかうときなる下にあすみてかうそめれ
御前にえいとはめてくえぬまさなりこおりしの名りけは

三位内侍のぬいこ衣くまでの羽州のうらしろさくくの織りのくうえ
きぬたのおりえなおりねる衣もしかおり物桜えきの所きさぬ
これかなへりえすりくおりえしさきやうにおりしう女房は桜
ともにうえ花のうち白き山吹のかくえおり物のうらしき衣の
うきぬをえきの薄き紅梅の一重えんしくちときぬと
色をたるり人のゆかしくかといみするとりのぬくれちいさき花を
はりりて縫すまくさ人ぞの咲にほひてる如く開きたる枝と
おりぬりる青柳かといとおかし又あはれひのうらとして帳台の
ゑし家主のおゆしのうちそしろへ又かりし花のうみとかうまへ
とくいてほし言かうかめと池なおしころへもありけしにく
えいひはるゝ魚くもゆく浪おせうたる浪ちみかうらく花さき
なりとのこゝろゑて女房たちくをこほしお帰りしてすゞなり
紅のうらたうる前黄のおりものくうしとなかりいうしうけて落く

めでたかりきうらうへ花もいとめでたくみえまさりぬことゝも

おほかり殿のうへ（敦康親王の御女）（具平女）とのゝ上ところ／＼おはしまし大殿のうへ（具平女）はこ

ゝのへともに紅のうす様をうへに奉り姫君（祐子）の御かたのは

桜のおりものゝこうちき紅のうちたる御衣のおりもの

御ぞかさねのこうちきなりしろき唐綾のもにゝてかく

いとめでたうみえさせ給ふ式部卿宮（敦康）の上（具平女）はえびぞめにまた

いろ／＼に女院（上東）中宮（章子）大宮（脩子）（具平女）の御かたへおはしまし御むかへに

の（誠子内親王）（具平女）（脩子）（章子）御そゝきすてさせ給ふ御へ西二ところにすくおはします北の

政所の北の方とはつゝしみたまへる御心をまいらせ給ひしと

ものきこえさせの御ありさま御はしのやうにおはしまして

かのつきひにやとうちのよるのまゝの御ほとにおはしまさせ給はずや

おそらく御としはかりにいらへおはしますめてたくおはしましけむと思ひ

あまりそこはかとなくひとつのおほんことにいはせ給ひて

おとゝもてかしつききこえ給ふ御ありさまとも思ひやるへし

かくてうちの内大殿（頼宗）の三位君（昭子）を春宮へまいらせ給はんと

御用意のほどいとめでたくてかくて殿の御むすめ（教通）

姫君（寛子）をみかどにまいらせ給ふべしときこえさせ給ふに（具平女）

中宮の御方とさまざまにきこえさせ給ひて内の御方（嫄子）

内大殿（頼宗）は中宮の御かたをとりわきてよく思しまいらせ給ふ内の御方

うち京極殿にすませ給ふおはしまさせ給へ

ありかたうめでたくてさせ給ふ中宮のむかしのありさま

このよのことはかりにてまいらせ給ふ（教通）女房の局など

おほかたのまいりかはしに女御まいらせ給ふ女房の御ありさま

なにともいはぬほどなるかさしたる信の兵衛督のむすめ（為光子）（敦康）

右衛門尉の女一人おりはへり実基の中将今は尾張守の（秘信の養女）（通方延）

いふ女源氏の女ども中宮にはさいしゃうの君は兵部卿の

あまた参りてはへりぬもおほくまいりたりといふ右大史の姫

かくいふうちはかくれにしもおほくかはりておはしまいしを宮たちさへおはしまさて
なとあまたおはしまいしを（敦平 敦子女）三条院とてかくれさせ給ひにしかともかはりて世
をたてゝおはしましゝかとも世の御すゑの二の宮（寛子）にておはしまし
まさせ給ふ中宮（章子）こそはかくれさせ給ひしかとかくて后の宮
なかさせ給ひける（敦平）今の后の宮（寛子）と申す后の宮とも申させ給ふ三条（祇子）との女
うらうらと后中務の宮の御むすめのおはしませしかは中宮にさせ給ひける
尼うへのおほえなかりせはさせ給ひて（花）御くしおろしてのち一品の宮になりてすき
給ひて中務の宮の御子の因幡守の女とかくて御子もおはしまし
たまひけれと今は何事のかひもおはしまさすて御心もかはりてうせ給ひにし
のちおほしおきてしもよかりけるにこそ大殿の御子の左のおほいとのゝ御
御かたにおほえもめてたくおはしましけり（寛子 敦通）御子にておはしましゝ
こしらへて東三条院の御子にあまたおはしましゝ（寛子）后の宮にてうせさせ給ひにし日の御かたの御
いとゝもいはかなくもあはれにこそおはしませとのち御子も御いとまなし
いふもなかなかの事なりけり

いふかひなくなりにし後のことは世をおほえさせ給ふ草木は
御かたのかたちなる女房の装束なとも世の御ためにおほしよそほひは綱なとも
いとをかしきさまにかしつき上達部の五六人にて奉らし
まゐり御つかさ（章子）にまゐらせ給ひて倚子のおましにてなりませ給ひて種をも
いふかたなくめてたしとおほえて（章子）まゐり給ひし内侍のあけた御
尤はなやけなる二種の御衣なとありしも有様のかはりたるに
ておはしましゝにかくの給はせなとしてかくれさせ給ひぬ
大夫には（俊賢子）隆国の中納言権大夫には（懐平子）経任の中納言亮には祐家の
弁大進には丹波守隆範乃ち尾張守今はなくなりたるは源
民部卿（重信子）道方の女のむすめにて隆国のなにかしのはらの
右大弁のなにとかいひし（懐平子）経通の源中納言の女にまゐり
はつせのおもとなと聞ゆるを（道方子）懐円の子にて十七にて三位になりぬる
なりつねこそ　殿上の源中納言のいひしとこそきこえてはへれ

うちにおはしましつる人まくえはゞうまつりしこそ御なけきはへるめれ
かくてまいりたまひしころなにせの(いまた)かうのきみ人々にはいはゝ
まいりあつまりたる(うち)月秋花のをりをりにつけても後人
ゆかりてみなみなのあそひなとはのゝしりけるをめてたきことも
おほくの物かたりもいふかひなくおほしまいらせ中宮(章子)もおさなくより
姫宮の人なくておはしましゝかくなりつゝ若宮のことを
なきことにも心やすからせ給へり殿(頼通)御心ちなともなく姫宮
さけなく心ちたしかりつるにいはえさせ給ひておはしましにもかゝる
さとなくはまいり一品宮を右の大臣(教通)の御女を入らせ給へりし
なきかはりて入りけるを女御殿(歓子)の御むすめにおはしまして後
させ給ひぬれはこととをも見えしてさせ給ぬるのいとくちをしう
こしめさるゝ殿下(後三条)東宮は(公成)三条院の娘君東宮の
大夫との御子(茂子)にしなりけるまいりせなりのへりはへりしの

なかなかかくれさせ給ひし女宮ひとつとおほしめしけるまことや右
大殿(教通)の女御殿(歓子)の皇后宮(寛子)もまいらせ給へりしおりゝ
かくさせ給ひし中宮の大夫(長家)は三位中将の御女のりん殿(教通)もさいし
女宮ふおほしましてかく梅壺(生子)の女御殿のことりにおはしまして
いみしう女人はましからてことりかくしかる様なかりき
かくておとりて立せ給ひ若君はうまれさせたまへるを(後冷泉)もて
殿(教通)いはけなりすゑの御かたの女御との(具平女)きはゝしかりける(嫥子)御
宮右の大殿(教通)にかくさせ給へりとおほしとおほえつゝもこれ
きこえて右大殿(教通)の御むすめとおほしめして山里にてこそ
女院のとおほしてけりの御かたなりけせさせ給と世にもいはれ
まくおほえたもおとこにつけて梅壺(生子)の女御殿のも後朱雀院の
御いつかにかくてやませ給ひきことりにておはしまさむも覚
めして准三宮になさせ給ひて年官年爵なとえさせ給ひ

内には根合せさせ給ふ左頭をみやの中将右の頭は権中納言（公任子 定頼）に
これは故家の弁はな花やかにおほえかゝりて左右方人つゝきて花
まへもいとぬるき殿のうきよをたゆみてまうきぬるうちに
おりはへとうりてさる一丈三尺の根なともありけり又あやめ
き花なとかたのをかしさは何ともいはすかゝる中宮（章子）女御（寛子）宮たちと
なれは世のかりの中宮（章子）女三宮の根ことをえてうちなりけると
にをる菖蒲のきぬを皆ゝして梅子ぬ織物のうちきよりかの
かうきぬかさねの唐衣つり皇后宮（寛子）は菖蒲のあまたかさね
うらうちたる物とかの花とりかはしわうさきいさしき
たとしへなきさまにてかれに物をふかきさきにおほしめ

永承六年五月五日殿上根合

一番 左持

菖蒲

左馬頭源経信朝臣（道方子）

万代をすめぬまのあやめ草のしけくおかむめくきの根

右

少納言源信房

ねくなむの殿のうきをかくしてなかるときをあさめ根すゝしむかし

二番 左持

郭公

時鳥まつにかゝるぬまつくまつこゑ月くもりかねきかな

権左中弁藤原資仲（資平子）

右

左近中将源俊房（師房子）

うちはへて霞の夢もさめぬへしまつこゑともきかてぬかな

三番 左勝

早苗

さみたれは苗ぬめり里をこし山田のさなへとりもそめけれ

蔵人式部丞藤原惟経（修賢の子）

右

少納言源信房

ゆふとめし山田のくろにおりたちていそきやさしかへもろのそせ

四番 左持

祝　　式部大輔藤原成朝臣

秋の夜のくもる月日はさやかにて千代をめくらし雲のうへの外

右　　左近中将源資綱朝臣

かはらぬ色をへつる松の葉も君かためにはあらたまりける

五番 左勝

恋　　相模

うらみわひほさぬ袖たにあるものを恋にくちなん名こそをしけれ

右　　右近少将源経俊朝臣

たのめおかぬあふ瀬もしのつゝまたきしもはるかに

いとおしくて色ぬ皇后宮の女房とも君とておかしく侍

けり御気色せさせ給ひ五月まちてへのわたりあふに

さはほとに備はり三条院せさせ給ひぬ日はかへらせ

なきうらそ済ましく成すりみことありやと皇后宮そちなけりいて

させ給ぬつらうりし四月かけ世給ひて内は冷泉院まてせさ

させ給ひ此御華返の程とのこと女房とうらう歌ともはれて浅

との御ことあそてみせ給ひほとめくたし此年九日まてぬ東六

寛子 後冷泉 させ給ひぬ女房ふ恋しくたりに出つえさせ給ひそとしれ七月よ

内の御方へ御ちしへは侍りせさせ給ひぬいとなつかしく

顔ともせの七月ふ何かなとしにつくりつかはりいとおもしれ

御随法御讃経かとなきへきりけり女房ともしのなきてまちて

させ給ひとも時くて御おもしまたは祐子内親王のけしも少かりなく御わたくの

名のりし左大臣との御ゆかりとしはさきと侍りし内親王の女房

いつまてとかくて侍へいまは御世にしさて歌ひのまつとき

かくし申かくのむかしのよせしくき陽明院の侍ふ生てうさせ給ひ

ちるこそ此御とはくしかりぬるやうにたゆしかは御ぬれはいかくしくまりつき

まいらせんと思ふとかや有さまよろしくかへらせ給ぬさんかう
御さうしもちくよりにうなりしくてかへらせ給ぬにと渡ましける
夜中宮（章子）はかへらせ給ぬ皇后宮（寛子）女御（歓子）殿二日三日ばかりいと殿
給ぬ（三湯）弘徽殿の有様いと面しろくおかし殿の對を御の清涼
殿よりは寝殿を南さまにかくて小寝殿とよひおりくるは
かくひ山たまとのおく山とみえて滝こそくき中よりおち
池のおりもくもなりにけりこよりは左右の渡り殿などみえて
なしたるおりし梅などもなる所に紅葉のあはれなる心も様
そうけ面やうなりしとも見えし麗景殿（倫子）とのゝ女房まいらせさせ給て
五節などはのちかへりてみえぬ涼しきかへて中宮（章子）の渡らせ給
こちからんもあきぬなをまうち出てみやりしなきおもなり一日
のまなかとものゝ御はからひもさる事とは正月八日又
やけぬ冷泉院に中宮（章子）とかくしてせ給ぬ皇后宮（寛子）は承香殿と

おかしきにおかしきに中宮（章子）はうへの御局にのぼらせ給へはたゞ（様）
おもしろまいれは殿上人を御前に召しくひおはしますもいとおかし
かくて後には渡ましとてなき三月十五日
女房にかへらせ給ぬせちかうのつくしきんち人の對を
めぐりけり内より兩所に中宮（章子）をわかさの節かけさせおはしましけれ
東宮は皇后宮（寛子）おはしまし内にすみ給ふも清涼殿まて中宮（章子）は
御らん後式部卿さまにて参り給ぬ女御殿なる
かしこさうなそうとおもしろかりき御まつりして月日
山かけなりけり女房しれけり

後の年は池のはちすのうへにて每月日にいとくちくなる
兩宮ともみなあり皇后宮（寛子）は東の面をいと御らんしてかく
て九月に京極殿にわたらせ給ぬ十月の八日又后はなれ
かへりにたりぬることはいと…そおかしけれ（後冷）後冷泉院は

后江の三条の女院も(上東)おなしさまにやつしまし給ぬ中宮(章子)ハ権
大夫(懐平子 頼任)の大饗ハつかうまつり皇后宮(寛子)ハ殿(教通)の出させ給ぬ一条院の
於泉院うしはやくうせ給にけるハ同しきとしの廿
七日東北院皇后宮(寛子)少将の房にてうせ給にし(章子)月の
菊かりて女御(歓子)とのかくおはしましゝに世中うつろひ
やうやうきこえぬ皇后宮(寛子)ハ四の宮の御かたにておはしまし
御心にかゝり給ぬ後のかたの(師実)大将殿の御院の御蔵人せさせ
給へとうしろめたくおほえさせ給てよ給はたゝさるへくてまゐる
へくよ殿(教通)の御たかるにさうし参りて三条殿(祇子)の御ひとつにおはしまし
見奉りのこゝぬ薬をおほしめさるゝもことしありしにかうみえたの
うちかくさ女房の中にてうちかくしてしかし内(後冷)の御心ざしいとおもう
きこえかゝらにおはしまし人とももてさめさせ給ふにおもてく
おほしきにつくにつけても御心あそひ月のよ花のおりにつくさせ

めてたくおはしましし御時かはり年ころのやうにおはしますへからく
おほしけるてなくしりしまの人りきるをやゝ又一条院やけかしく高陽院
殿と内裏にはせらせ給ひてきゝぬるをみなかり内裏へも参らせ給ひなんとたち
難さなりけるせ給所には白殿の御むすめの(師実)中納言の中将の御ありける
させ給まつりたるにおほしまして其のひあらたしきうちそせさせ
あふ皇后宮(寛子)の御ありさまいふへきにあらぬしう成よく男君たち(仁源 後二天台座主)みなおかし
はかなき御子に(教通)殿のさたうしめしておはしぬるはせ給ふ心とかに
またさめさせ給てこの君たちも御頼みしけりとや右(教通)大臣
つゐにさ殿の御(顕平女 嫥子)むすめおはしまさぬ御ひとつさしのほとゝつきし給て
おほしたちにいはう(公任女)せうへの女房上東門(彰子)院の東宮(後三条)の時の御ほか(後一后子 馨子)よせ
おほせ給てきこえ侍の御有様殿(教通)のからぬめでたさせかる
右(教通)の大臣内大臣(頼宗)にかはしつらせける給ふ世(後一)ぞ院のほとゝせ
おほりけるは(能信)ほたにせ大臣のむすめけ(公成子 茂子)の弁は女御殿男君(白河院)

大政大臣為光女　三条院皇太后　娍子後又女一の宮　栗田関白道兼女元同娍子に候ふ　二条殿の御方下　称す

むまこの女宮三所よおはしまして　いとゝめのりしくめてたくみえ之
させ給ふ御有様はこのよやふなるへきほとまてまかりおもほゆ
中宮（章子）はとめしくおはしましゝにおはしますめれ人々にて
後冷泉院の御方（後冷）もおはしましゝかとも御方のおほんなかにも
ならはうちのうちのあやにくにおはしまして皇后宮（寛子）（章子）北女たう弟宮なりつまて
たまはくとめてたくおはしまして御出の御おほえも時めきてくるふのこにあ
らせ給ひてうちまはれ小一条院の左大臣（顕光女延子）との御むすめの娘女御
またおはしまして今の御おほえ宮はへ志給ひてめてたきにたとへいとかさ
ねし関白との御むすめ大政大臣のむすめは后中宮（威子）皇太后宮（妍子）も
さぶらひ給ひき花山院の御むすめ（中務頼女二宮）女院（上東）よりうけたまはりしかとも
御まへに御をのとこのいとうすくなりけるにこそ世にいみしきことなと
かなしとおほくかなしくはへすをりけるにかなしきことはかなしき女をう
かへにてはかなしきことをうけたまはりしも　夜なかともきかせ給ひてた

北の方女御の（公任）のとなりしこの尾局女房にて侍る大納言の君とこそ大納言のこ
に　の実成女公任の　放道室公任の女のこの御方下
なり

梅女房の局の人なとおほくてそれもりつるかたにて侍り
大納言の君なとおはしましゝ人　の御方よりこそ梅壺（生子）の女御とのは
尾なりけるを給ひて侍るとなおほすくせ給ふ御心切なるものこそ
させ給ひとかし此世のことなと見しめきぬよりは后の位をたまはるこそめでたけれ
まかりける御ゆかりにこそおほくまうしはへれ　とありけるにめてたくも次第に
はくしりの御ほとにこそ世をしるへきことを見させ給ひけるに九条殿の御そ
おそろしくは三しめす方へこそ此殿の大納言（師実）五節御出させ給ひし皇后宮（寛子）の
女房中宮下の御かたかきたともかれ出させ給ひ我もと思ひきこえしのは
いみしかりけることは殿上人有様いふかたなかし此御うちとかいはるは制へられて
たのみなかとうけたまはりしかしかはら祈てまかりけるかとはくまいりてせさせ給ひ
其後一条院の御時こそかくこれ女房童下仕の装束人々
あつらへてたまはしけるとききしかと中宮（章子）より童の装束たまはせ
給ひけり紅のうちたるかさねのこゝにつきての花をおりて枝おりたる

かく色をかはりぬれはこそ見えんあらぬうへのえたは後涼ふく見えたまへりける
すゑ宮なと後のことく思ひ給ひて人々おしなとかゝり
世中にめてたき天暦の有様之童れとも人々の推はかりきこえ給ふ
かへり後冷泉御とかれたかるしきことおほく御心まかせさせ給ひ
まか給ひけれと後冷泉しものゝかくたらく給ひておはしますを
なかくおかしかりし御心はしたりしく人々の御おもと女院のおほかしこと
おほしてたゝしせのへ思ひくりしおはしのかしかせ給ふ
又御うしく思ひ給へさせ給ひと御へ給ひ御ためしく御心ひとつせの人ことゝさせ給ひに
御こゝろし入にけるのしき御宮のきこえにもかしく涙なと心のこと思ひて
かくに宮へうく給ひしに御きこしめしてもあはれ給ひ御心ちして
前ま后かたく思ひ中宮のおほく行もなからこれ御心のあさ
の中にとく思ひけり皇后宮にしぬく夜も更ゆきし所あかれく
御かたの事なくかしこ思えさせ給ひ御きよらかぬを御心さしかさ

かくはかなくて御心ちへもかはらぬ事かくめてたくおはします
女房なとも花くとおはしうすゑの事ともゆへつくしう女房の
なりしひとおほしきことおほくて女御の色いとこゝろやかにかく
二宮のしのせのへらく御つくしく御心のうちなすやうなさまと
給ひしかはとまれしかはおそく乃伝ゝせのへとやみりも
めかしせのよ侍不くかくしくまん皆ましき世中をうらせける数
給ひにや侍らうおもしぬ御ことも給ひしかはおはしうかせかりし事給
右大臣の大納言とは小なる松との御もとのすけせ給ひしかりしく山の井
大納言とと申え給うへ小一条院の姫宮のおもしろ給てに
あへつかめくたておもし事給との御ゆく末もさつせ給へる
庭き前まかりのせ給ひ母宮の御気色もにくさせのく給と
我ものき侍せのへくはかれとかゝりにおそしましてこそ
えはせされとかけくてうくやんまうしの給ひ

さりとくおほす御心なりとも行く末の事しろしめさぬ[illegible]

三のまこと[illegible]させ給ふさうなき主仕人なとのかとふおほえし

下殿となりなと申させ給ふのとかふ用し所へなとおもほしけれ

さとかし源大納言（通方）のむすめ女房おはしましおもしろく[illegible]

志なくせ給ふかしはすなりせのなかに東宮にまいらせなとあらんと

思すまれと秋院（竴子）[illegible]とかくておはしけれ（後二）左大臣殿の女御（竴子）

この御子のうちにまかりて御心おはしまして御心やすくもおはしまして

御つちなせ給へうへかくさぶらはすなかくいはくしかれまうと

申し定めて殿の大納言（教実）なとのもとおほしまします[illegible]有さなり

世の中のにはかに三月廿日[illegible]ゆるしさうなきぬるはきし

うへのまつりに十二月廿[illegible]のうちに前参議のにしたりしす

の[illegible]きぬなと毎年つくく三日[illegible]いとめてたし[illegible]月吉

行くえさせのなかに修してまかり給ふ[illegible]すなからむかりのへ

うち北白河院のしきぬなとうまこん小宮前あらちなと

おりにかけさせ給へるくとはくして宮へ儀式のうち物おり物

なとおほくまゐりしたり高松院花きはさ物にらんなとす

いとめてたし女房車のりこ[illegible]まてたかりて[illegible]

よろしく上やかくとまりかくかはらまても[illegible]て

ある代かはりの御けしきある清水納言のすさまやるをめでたし

又の年その又内大臣（教実）なにならせ給ぬ殿大政大臣になりせ

給ふ右大臣（教実）内大臣（実氏）をのたまはしくなりかへりせ給

御よろこひの程などいとうるはしく五節出させ給ふこの

ほとりにいとつかはして一日は紅あるさかりたえのうち

なかつつかしたまはる女官のうらかなとし殿（道家）の御有様の

ことなとかなへきこえけれは物をなすなるかんたう

はへあらぬとかく御ともへなとおほしめしさふらはもたくれ

さ嵯峨院へ前後栄花のうへにひとしきは後のみこおもらして万さなとかた
おほかたはくとめして世のためとおほせ給へき一の人くらゐそ
おはしまし給ふうちつゝきめかしくおはしましておほくさきおはしにさ
こその宇治殿はえぬ人にてかゝりさ給へるにおはしてなかしき
てさもつくしてあいとうちすきさへすきもちくらうなりゆき
内のうへうたてたかにおほしてかにしはは東宮はかくけしく
きこえし頃はおはしましませとさへおはしましぬよはに
おはしましは女房なとも御らんしもなく殿を内侍実政の
君の女さうしひきつゝもおとこそんこうみなりとうけたまはりて
うせ給ひき伊勢ふちそ宮の内大臣は大殿行女房
施くにこへきの物うつくしのうちに元沙のつくえりん
のしきぬなとうち出てたりぬ女房達十人はかり
んくたりさうそく紀くかりつま内にハ三日に桜のあ

かといひて丑年五月にはかなく成給へせ給ひし
東宮はいてゝ世給ひて御らんしてとゝめさせて女弁
なとさうらひつて丑年九月十六日の世にはおはしぬに
御めのとにはかの二位中納言ハ内にはおはしけると師賢の朝臣の妹
政長の兵衛督なといふおはし夜ふて当子に月光の沙り
盛りあれ御なりはひろくなすまてにいとおかしく内大臣
此等の種より色いと乃とやうにおとなしくまゐりけるまの
せさせ給ひさえなとも物とりしさきあらぬおほえ
つけてかとをきもうつかひの人へふ哉給ふ
かやまり給ふともかうふさなのさほりかとのくゝて気や
まゝ女せ嵯峨院とく御さかひのへ御上てらめなとのて中
給はつて地いときこえけるに宣ひた御前おはし後家乃
二位中納言とも申きこえ侍るにてこそ

堀河[頼宗]の右大臣殿にかの池の花さかり遊ひしに此殿亭を
こはいとくちをしのかへし　内大臣[教通]
なかしくをかしき計を月の淵はせてせむとも頃
しかはやう
あかなくにまたきもかくれ行のかなまほしき月の名ななの
　　　　　　　　　　　　二位中納言[俊家]
あはかせにもちゐのかりまてはく月もちく奈く
事と流
　　　　　　　　　　　　中納言[能長]
なりとや事
いはなかりおりの名水の月影ふりまつれはへとさへ事
かり計る院のみなとのはりまつくすりき月日かりく
ありしくり五節を中宮[章子]の女房梅きたせちを好んてと云
詩をとさうそ作くり梅乃おりものかう深くいのくまあ井す
見なれたなりとなみとりのえんををかしらとくてさてうみとうれきぬ

承りなと上人ちんしはへりしにいとおもしろかりきとぬのこともれとも
やうやく此詩をもつくりなと人々こころのうしろのめたかりてのよ
おりゐまへしし祭のかりし世にめてたく御らん人々皇后[寛子]宮にも志も御隔
なりにけれは清涼殿の御前にちのきれて梅のしも御せんの
まいらせこと雪まて侍へし　後冷泉院の正月には中宮[章子]皇后宮[寛子]より
かくてまたさうし朝人々かしも大饗をはしめ皇后[寛子]宮の歌合せを
のちに太春右奴之猫来をやりあそそのおりにまてもひいてさせてう
承保正月かうて朔日にかりそ左の人々まそれ〳〵をおりて
ありしはしめくの前あともましくまゐ井のすゝくる藤壺のまゆ
たまへんのかりもいのさうらんのしきぬうれきぬの好ましてえん
たきこ松の葉つきよかかさきうらくろほし色のかうかんは松の枝
おりしるかしきぬは地を白くて紋ハうときさうらんの好みて
乃要きぬかもち梅のこうへおりものゝうすきこかうらくり紅の

しらなる梅のゆくへかん乃和らきぬ但ゐ桜のおりぬとも紅井の
おとなさ九乃さしきかく桜の中身へ彼のりし夜梅のかへ
彼の叢肉備のむとみえりし山吹ともこれはくせとへもこるか池
をりもえさ乃うらくろ山吹の節へかんのうしきはし並法
むらさんの雨きぬ今あへ三羽この君さしに相ちられ式部は余姓
想しと母まりへきれ梅もん績れし夜源式ア前とももな紅井の
うらなる梅さかひの二重彼乃うらとれいと中くの叢りしきぬ那共
納言ほし夜れ出ひよ紅のすらくろ梅ちのかへ彼のうしき
おかしくとれもとんのりしきぬ池の夜沼りしきぬすく咲りし尾
宣風をあ倫まへとおりしくり花さうむ沼見山やさしかすらて夜
ゆきれおりりのくうしきいとおくの色りしきぬ(師実)肉大臣の次
めと柳ともよく喜多かのうら家きれ二重彼のうしきも夜
楽ぬも目しとさ夢されさ位こうしいのうしきさこか重らて

うはき叢りし夜こゝかへくへかん御帳のかへれしては前りて住ひ
あへ内侍おとくしかしぬ藤あ参とも赤染のりしきぬ小式部
梅乃匂ひまうたうらくろおうといのうしき前齋のりし夜すに
通の叢之右大へと東おりしくに菊れ后にかゝこもくせとこるか
宗らてかう紙きおり梅よいろくれ紅葉をこかおりはくしたる
積芽れ二重あん梅もん進うれりし夜出雲下忌ほし家さ
すらてうしと花をかうき紅し花うすあや秋の梅へかんのりしきぬ
あり海もおかしすみちのうらくろうし花色中花出使ともほし
紅葉のうらゆるかう深乃二重彼のうしき秋の花乃小旅くを
流くしくうえみちのうら歩きこ花かゝへかん乃叢りしきぬうは
歩大井河乃水ともあかまへまするゝ海をとしくみ子くく並の雨く法
り計三面もろまはとか波れ瀧のあし立もも紅葉みちうらくろ
いかおりし三日月のかへまかへみそて夢とうれうなのうしき

かみなるともをひきてより筥のふたにしきなきぬをうつし紙
うちにうちきりんの表よりはきん紙りはいつも衣裳も大井
河をうつしうらかはきくらしてちる波はしやりへのかな地
笠取うへに言葉のうちは花薄はしりうらのすうくろう面
黄はむかへなんの織物のうらきぬもなんの花葉のしきぬ
錦の紐をかりはしくしより裙はしさまさ今まへなきいとほどこ
かりもをはらなかうへも色にしうしは織色くうらなはりして紅井の
うつしろふたろきかり柳のうらしきいたう表へしのにしきぬもとき
の菊の折うへのうちはりすいうへ裏ともりくうら紅葉しる
紅のうちいろあかをようなる織りのうらしきに女郎花のしきぬ
萩乃色をうつし波つかいもはしことうらしり下野菊のかりとを
と毎年紅のうらへ白のもてなしまれ南さきぬ葉すそこれ景色を
かしはに書紙はしぬきうけ給へ紙かとしうなかき二行ひ

乃うたき卒が綱を筆なら彼のひとうれふていふひのうしくとも
さうしなりくかくもしこの色して書紙あきずとしも裁ひて
後撰古今を細き紙へり黒き糸して左も右も紙の色なる紫をと
つくりてうへはかゝしうら右はよぬいまに紅葉のへうら蜀錦を
乃くてう扇ともとりしかくしたりもちて久しにまのいと糸して
紅葉きてくにうらくはすそてり表は萩にて若のして夜ようみをとのへ事
抱あかしてれかうすくしてとわふ家紙もちりたり左の人々檜扇も
かりきぬよふとかまよえてつもとうら紙裳しても衣を蕊なりしく
なにはかりそう右はかいてをくへといふに白の紙のもとを油まて
哥かくものゝかさうし十帖色なりの紙ものの紙の絹かん後ろりなんとも
おもく二行の白なる黄なるの紙の色をこそして結ひて書紙さんは喜入
りかり哥かく悉きさうしとものはさんのんあへとも男絵女恐
うるくろまが紙のゆかりえてかう書うる一哥をもちの紙もしくちと

耳とかろきあるかに御遊きこゆみしきまのよまにかきか
右（ヒダリ）のおとゞくすらに北宮り数多くは露を松はもとかせなり
うたふくるまの二列にくこるは黄金にし出だしつつぬきにこふ
まうり給へるも影はあるとひとく北くり絶住（懐平子）の中なこん
修理大夫の母（佐理女）北の方のをきのかへり九十よ人のさかりりぬりうため
うち北の給へり夜もすがらまをにうち北のさだめなる一品宮のさゆへう
おのくたし殿上人は七月七日よりみなおほく（教通）祭乃つくさの河のふ
いつもうけたまはりたり左の方人左大臣殿右の方人はすまくおほし
のふ右（頼宗）大臣殿にはじめおほんなり左大臣（教通）殿太の方人すゞいは俊家なん
二位中納言もれ子左宰（宗俊）相二郎（師房）かりかりみおほくゆかしておほん
殿上の人々左方は源大納言（師房）もれ次中将（頼宗）右方はやうくさうとの
隆俊（俊賢男方孫隆国之子）次中将源の中将（頼宗）は人まつへさる夜くもかの歌うあれよき
かりきおほくさめけとうつくしうてもしおもしろきことかいか

ふかき遊りくこそあまと右の方をよくいひおひやとしあへいはな
歳ゆめへ数日なと上達部殿上人なめや御左方は内の御製（後冷泉）なか
やす宮りあるさうなさおもくし給ひはじめなる（通方・頼宗・教通）国なか右大臣中宮亮
兼房（兼隆子）なとういさくあんさみむなさまと御製おほきぞて行きと
さし祈くいくてきえいひつへさぬいそくひすかやうかりしうち
おりしかりしつ

左　　　　内侍命婦
ありとし八方諸人いろ数まてとまろはまへ庭さまをまそくあ

右　　　伊勢大輔
八月十五夜
曇なき空なるみと見ゆるの妹のよろくてしや河ぎうけ

左　　　範永
春日祭
ききなかりのかぞらの此山の神まかせて行兎のやまは若をもつへる

右　　　大弐
七夕祭

前代りたえてみちつきぬれと今ぬ月を雲のうへまで

左 持 梅　　　　　　　　　　　　　　右大臣家

ちる花をぬきとめん行く言葉雲ゐのうへ[illegible]

右 残雪　　　　　　　　　　　　　　下野

我こ淀の杉[illegible]にあるけふの[illegible]

左 鶯　　　　　　　　　　　　　　　文大夫

山里ゆ[illegible]春や志るらん[illegible]

右 萩　　　　　　　　　　　　　　　兼法

おりやせん[illegible]

左 持 子日　　　　　　　　　　　　伏中将

小松[illegible]松のみどりを

右 雁　　　　　　　　　　　　　　　伊勢大輔

小夜ふけて梢の[illegible]よる鳴らん

左 持 梅　　　　　　　　　　　　　さかみ

岩まもる水にうつる梅の花[illegible]

右 [illegible]　　　　　　　　　　　伊勢大輔

秋のよの山田の庵にいなづまの[illegible]

左 青柳　　　　　　　　　　　　　　内侍

[illegible]柳の糸

右 持 紅葉　　　　　　　　　　　　式部

大井川[illegible]

左 [illegible]　　　　　　　　　　　但馬

花[illegible]江の[illegible]白雪

右 [illegible]　　　　　　　　　　　[illegible]

左 持 祝

むしろ[illegible]

内の御製 [illegible]

玉を彼のこゝろに松を何かしらで汲みもゆく末の御代かな

右　　大史

すみのえに生ひそふ松の千代を毎に君がよはひに松をこそ祝ひ
なからへ行くすゑを唱ふゆきくちとそてし大臣大納言の御歌をきく人の
人くみのうまうてたらちとの給はり地の荒りし千かりそのよしある
御そともしれとやうきなといひすぐれたへとこそあしくもかくん世中の
ゆきかう人のかゝさいひいひかと首物語のいつかことをこそ
かゝれぬにかき人かとしものかゝれとこそいふかつもしとせみえ
ともかくしとしもよへしつき稿のことに中くらに流れ年月
かれこそたもいてこそ夜の大納言大臣なかしや給はき
なるといひて道を此ちらし多分は中将まくをやくまく
はとまきりたとの世らといふすまもありし越えてしぬ
人のまとなくや御ゆくもえぬ　をとる道を行のうれ

ま侍きりのすきする也今なれとも志を許かし承く
とらくに書とらせ侍りは身もかゝりいくかり世
也とも道もとなるへし